
全力天使【ドM】

みかみ てれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全力天使【ドM】

【NZコード】

N5992Y

【作者名】

みかみ てれん

【あらすじ】

「あたしをドMにしてくださいーっ！」

天使の国“天ツ雲”^{エルティイパ}にて、主人公ハクスイは衝撃的な出会いを果たす。彼女の名はルルノノ、人間たちの世界を守るために日夜奮闘する彩光使の美少女であった。ふたりの再会は天使や悪魔を巻き込み、“大襲来”から続く因縁はハクスイの運命を捻じ曲げる。

新感覚『ハートフルSMコメディ』、異世界転生やVRMMOのおつまみにも、いかがでしょうか？ 完結まで毎日更新（予定）です。

この物語には、軽度のSM描写、毒のあるシックハリなどが含まれております。ご注意ください。

プロローグ「出会い」

ハクスイは止まらない。

本日最後の試験だ。たくさんのギャラリーたちが見守っている武闘場には、熱気が渦巻いていた。伝説の達成瞬間を叩撃しようと、他のクラスからも生徒たちが集まっているのだ。

そんな見物客の中心で、もみの木の棒を持ったハクスイは緩く構えている。片手をジャージのポケットに突っ込んだその姿はどう見ても真剣勝負の最中とは思えなかつたが、豊張りの空間は完全に彼の支配下にあつた。

武道場に立つてゐる少年の数は残り一二三名。そのうちのひとりが駆け出し、ハクスイの斜め後ろから切りかかつた。前方に固まっているクラスメイトたちを視線で制しているハクスイには、避けられるはずもない一撃のはずだつた。

しかしハクスイは横薙ぎの奇襲をターンするように避けると、勢いを殺しきれず泳ぐ少年の背を軽く小突いた。

試験監督官 シュレエルが疾呼する。

「マシマ、退場！」

クルセイダーズ

対悪魔用乱戦稽古。

バトルロイヤル方式で行なわれるこの試験は、これまで学んだ武術の集大成を発揮する場であつた。勝ち残るために必要な資質は、ただひとつ。バイアビリティ生存能力である。

標的がなぜ後方からの奇襲を避けられたのか、そのことに気づくことができないマシマ少年は、まるで悪夢を見たような顔で武道場

から去つてゆく。

ハクスイはただ観察していたのだ。向かい合う生徒たちの表情が変われば、膠着状態が変化したことは明らかだろう。あとは視線を追えばいい。どんなに潜めても、踏み込みの足音は消せるものではない。ならば避けるタイミングは必ずとわかる。

だがそれをこなすには、気が遠くなるような年月の修練が必要とされるだろう。加えて、搖るぎない胆力も不可欠だ。

ハクスイはつまり、そういう生徒であった。

中肉中背で、皮肉げな口元。若干黒髪を伸ばしている以外は、一般的な生徒とはさほど変わらない容姿なのだが、ただ、ハクスイを象徴するものがあるとしたら、その眼差し

校内をまるでスラム街の片隅ように淀ませる雰囲気が彼にはあった。世の中の全てを意味のないものとして映すような黒瞳。夢や希望やそういう光を完全にシャットアウトし、それどころか根こそぎ吸い込んで消滅させてしまうブラックホールじみた目だ。

ハクスイの前に立つ同級生は、ほとんどがその圧倒的な負の気配に飲み込まれる。言葉が出てこなくなり、なぜだか心中に漠然とした不安が去来する。ハクスイの持つ奇妙な圧力が噂された名が、「限りなく悪“魔”に近い“天”使」、すなわち、『魔天のハクスイ』である。幼い頃から鍛錬に鍛錬を重ねてきた賜物である化物じみた運動神経さえ、彼の伝説に拍車をかけていた。

転進。ハクスイは振り返るとともに駆け出した。彼の強襲に、後方で身を寄せ合っていた小魚のような少年たちは震え上がった。

男にしては長い黒髪をなびかせ、ハクスイは広い武道場を縦断する。恐怖を押し返すようにして突き出された棒を弾き、殴りつける。ひとり、ふたり、そして三人。繊維を喪失したクラスメイトを床に

転がせば、これで背後の安全は確保終了。ハクスイは木の棒を手中でくるりと回す。

「『魔天のハクスイ』めつ……！ 今回もクラスの男子でひとりだけ実技満点を取る気か！ そつはさせないぞ……！」

残りはもはや十名にも満たない。一撃当てられたら退場の勝ち抜き戦にも関わらず、彼らは一群となっていた。互いが互いに敵同士であるはず、なのにだ。

そこまでして、ハクスイひとりを勝ち進めさせたくないのだ。浮かぶ表情は、僻み、妬み、恐れ、つまり負け犬根性そのものである。

「なんだかな……」

ハクスイは思わず髪をかきあげながらうめく。嫌われっぷりここまでくれば清々しさすら感じてしまう。

そのときだ。武道場に眩い白光が満ちた。

「許さない、許さないよ、ハクスイくん！」

一塊でいた生徒の中のひとりが、気迫溢れる大声で叫び出したのだ。その少年を見て、ギャラリーのめいめいが声を上げる。

「あつ、あいつは！」「多分三組のナンバー2のやつだ！ 名前は知らねえ！」「なんて卑怯な！ 学校の授業で光輝武装(エンジエルパーティ)をまとい始めやがつたぞ！」「見境ねえ！ 見損なつたぞナンバー2！」

高笑いをしながら、ナンバー2の少年は武闘場に浮かぶ。彼の両手両足は光に包まれ、その背からは真っ白な一対の翼が生えていた。そばかすの残るあどけない顔立ちをした少年は得意げに天井付近を飛び回る。その様は天使とおり、むしろ虫のようだ。

「どうだい、ハクスイくん！　きみにはこれができないだろう！　ハーツハツハツハ！　そうだよな、天使のくせにさ、**機撰光**を持たないきみには！」

少年は、「」を射るような態勢を取つた。すると彼の回りに散らばつていた微光が集まり、手の中でひとつの大まかな輪郭を描く。それは光の輝きが定まってゆくにつれ、一本の槍としての形状を取つた。機撰光による初級の光輝武装、**光輝槍**アンジェランスである。

「どうだい、ぼくの槍は！　その木の棒で応戦してみるかな！　無駄だけどね！」

色めき立つギヤラリーの前で、ナンバー2が伸縮自在の槍を伸ばす。ジユツ、ジユツと音を立てて、武道場の床に穴が穿たれてゆく。その突きの速度はまさに光速。見てから避けるのはハクスイと言えど至難の技だろう。

さらに光の翼は、本人の身体能力に関わらず、高速移動を可能にする。狭い室内という誓約はあつたものの、ナンバー2は中空から次々と攻撃を繰り出してくる。

光輝武装対木の棒。彼我戦力差は圧倒的である。

「もう授業の度を越えているぞ！」「なんで教使は止めないんだ！」
「停学になるんじゃね？　ナンバー2」「ああはなりたくないな……」

…

もつとも、有利さと引換に彼は信頼をことごとく失ってしまった
だろうが　それはともかく、ナンバー2は一向に気づかなかつた。
先ほどから槍撃がハクスイにかすりもしないという事実に、だ。

ハクスイはやはり精察していた。彼の視線と穂先を。手元の角度と、狙いをつける直前に急停止する直前の翼の羽ばたきを。どんな

に相手が強力な技を使おうとも、ハクスイはなんらうるたえていたかった。

しかしやはりナンバー2は気づかない。今の彼はきっと見たいものしか見えてないのだ。すこぶる楽しそうではある。

武道場を斜めに走りぬけ、三連続の突きを回避したハクスイは、感情を映さない瞳で跳躍した。様子を見守っていたクラスメイトの一団に。「！」同時に来るなあ！」と悲鳴があがる。

「どこに逃げると言うのかね、ハーツハツハツハ！死ねい！」

完全に悪役臭の漂うナンバー2が放った突きは、ハクスイの脇腹を掠める。しかし有効打ではない。

飛び上がったハクスイは、近くの男の肩を蹴り、別の男の頭を蹴り、さらに壁を蹴る。それもわずか一瞬の出来事。迫り来るハクスイの唇の動きが、ナンバー2には確かに見えていた。

「死ねっていうのは、自分がそうされても文句がねえってことなんかね」

伸ばした槍を元の長さに戻すのを忘れていたナンバー2は、慌てて槍を引く。だが、間に合わない。身が竦んで動かない。

ナンバー2の顔が驚愕に染まるとき、ハクスイは木の棒を振りかぶつて、そして、回転しながら、冷蔵庫のドアを閉めるような軽快さで、もみの棒を振り切った。

「よつ

大根を真つ二つに両断するような快活な音が響いた。その直後、ズドーン、とナンバー2が武闘場の床に落ちて、潰れる。悲鳴が波のように広がって辺りはざわついた。

「うわあ……あいつ、光輝武装まで発動して……」「あれほど笑つ

てたのに……無様な……」「容赦ねえ、『魔天のハクスイ』……」「強い、強すぎる……」

あとはもう、消化試合の様だった。

今まで事態を静観していた教使は、深いため息をついた。女生徒からも人気の高い壮年の伊達男は、そのわずかにシワの刻まれたこめかみを押さえながら、撫然と告げた。

「……実技の授業、そこまでだ」

穴だらけの武道場の床を眺めて、苦虫を噛み潰したような顔をしていた教使の男の重苦しい言葉に、ハクスイは棒を払って構えを解いた。

「お疲れ様でした」

ナンバー2を倒してからは一分にも満たない時間で、彼の周りには立つものは残つていなかつた。ハクスイが頭を下げたその直後、ギヤラリーから拍手が巻き起こつた。見物人と反比例したテンションで、教使は目の間を揉みほぐしながら、苦々しくつぶやく。

「こんな事例は、初めてだな……男女ともに、最後まで立つているのは、たつたひとりか……生徒が訓練で光輝武装を使つたつてのもな……」

額の汗を手の甲で拭きながら、ハクスイは隣で行われている女子の実技の授業を眺めた。

女性陣も壮絶な結果となつてしまつたようだ。中央にひとりで立つてしているのは、見覚えのある銀髪の少女の後ろ姿だつた。

ハクスイは棒を肩に担ぎながら息切れもなく姿勢を緩めた。

「ヴィエカ、あいつもよくやるな」

授業終わりのチャイムが鳴り、教使がそれぞれにジャッジを言い渡す。

「ハクスイくんとヴィヒくんは、着替えたら職員室に来い……
床にめり込んだナンバー2を横田に、ひとりわ大きなため息とともに教使は付言した。

「……ネヒヤエルくんは、一週間の停学だ。それで手を打とう

（）

「やりすぎだろ」

「ハクスイに言われたくないの」

ハクスイのつぶやきに、ヴィヒはひつぽを向いた。学校指定の白ジヤージ姿のふたりは、足腰の立たないクラスメイトたちを置いて、さつさと武闘場を出る。渡り廊下を通ると、涼しい風がふたりの間を吹き抜けた。ヴィヒは長いプラチナの髪をなびかせて、颯爽と歩く。

そんな彼女は、反省とともにかぶりを振る。

「……学期末の試験だからって、気合を入れすぎたの」

「まあ、気持ちわかるが、やりすぎだろ。少しくらい手加減してやれば良かったんだ」

「……」

「いて、蹴るなよ」

「……ハクスイに言われたくないの」

（）

ヴィエと別れて、武闘場から校舎に入つてすぐの男子更衣室の前までやつてきたハクスイは、ドアノブに手をかけたところで、ふと動きを止めた。なにやら熱を感じたのだ。違和感に気づいて振り返ると、そこには廊下の角に半身を隠して、制服姿の女子生徒が立っていた。

ハクスイが見やると、女子生徒はパッと姿をくらます。

「なんだ？ 僕に用、か？」

試験の終わった他クラスの生徒だろうか。あるいは、やけに小柄に見えたことから、下級生かもしれない。ハクスイが辛抱強く待っていると、まずは小さな頭が見えた。あちこちがピンと跳ねた、毛糸玉のようなはちみつ色のショートカットだ。

それが徐々に覗いてくると、今度は髪の色と同じ、黄金色の濡れた瞳と目が合つた。ぱちっ、ぱちぱちっ、と何度も瞬きを繰り返したあとに、彼女は意を決したように姿を現した。

まるで童話の世界から抜け出てきたお姫様のような、凄まじい美少女だった。小柄な代わりに、真ん丸い瞳が星空のような広大さを想起させられた。

「あ、あのっ……あのっ、あのっ、あのー！」

「ん？」

拳をグーに固めて肘を引く彼女から、ほのかに燐光が立ち上る。

あたふたと身振り手振りをしながら、薄い光をまといた美少女はなにやら気持ちを伝えようとしてくる。

「えと、あ、あたしひー！　あのー！　ちっさのー！」

「いや、なんだよ」

「もう、全力でー！　エンジュルフー！　エンジュルフー！　スパーク

ングフー！」

「いやだから、なんなんだよ」

叫ぶ度に彼女の顔が赤く染まってゆくのは、酸欠のためではないかとハクスイは思った。ふわふわの髪の毛を揺らして、長いのはもちろんのこと、きらめくように綺麗なまつげの伸びた瞳をくぐりくりと回しながら、美少女は身体いっぱいで叫んできた。

「あ、あたしを、どうかどうにしてくださいーーー！」

声の残響がしばらく廊下に残り、ハクスイは口をぽかんと開けたまま聞き返した。

「……は？」

「あ、あたしを、ビックリしてくだわーーー。」

声の残響がしばらく廊下に残り、ハクスイは口をぽかんと開けたまま聞き返した。

「……は？」

ふるふると小動物のように震えながら、拳をぎゅっと握つて俯いていた美少女は、弾かれたように顔をあげる。白い綺麗な肌は、ピンク色に染まっていた。

ハクスイと少女の視線が交錯する。彼女は両手を前に出したり、頬に当たたり、髪をくしゃくしゃとこじりたりしてから、大きく首を振つた。

「やつ、ちがつ！ そつちじやない！ ジハ、心の声が漏れちゃつたつ！」

心の声？

追求したかつたが、やぶ蛇になりそつたのでハクスイは黙つたまま彼女が落ち着くのを待つ。できれば早く用件を言つて立ち去つてほしかつたのだが。

「だ、だからもうつ！」

すると、彼女の周囲がキラキラと輝き出す。全身から燐光を放ち出した彼女は、まるで地上に降りてきた彗星のようだった。

「か、かつこよかつたよーっ！」

叫ぶと同時に、彼女は反転して走り去ってゆく。それはあつとう間のことだった。

「……本当に、なんだったんだ……？」

一学期、期末試験最終日。

とりあえずそれが、ハクスイと彼女の唐突な出会いであった。

この世界には、天使がいる。

微笑む赤ん坊のそばに。親とはぐれて泣きじゃくる幼子の隣に。雲の切れ間から差し込む光の中に。家族に看取られてこの世を去る老人の枕元に。天使たちはそつと訪れて、一枚の金貨の代わりに、祝福を授けてゆく。

彼らは決して伝説の中の存在ではない。

空に浮かぶ雲の世界、天ツ雲トルティバには、今でもたくさんの天使たちが暮らしている。神に仕える彼らは人を見守り、育み、そのあり方を正しく導こうとする人類の守護者たちであった。

彩光使 セラファイ

それは天使の中でも、ヒトと関わりながら生きてゆくための険しき道を選択した者たちである。

光輝なる者。天使の中の天使たちの名称。彼らこそが悪魔を打ち倒し、人類を守る神の尖兵たちだ。華々しき栄光と熾烈な戦い。光と闇の狭間で己が身を危険に晒しながらも立ち向かう彼ら彩光使こそ、古来より人類に「天使」と崇められてきた者たちなのだ。

天使として生まれたからには、彩光使を目指す。それはある意味とてつもなく純粋で、優しい想いの形であつた。

そんな彩光使という夢を追う者が、ここにもまたひとり。
“大襲來”アリギエーリを乗り越え、その両眼に深い宿命を秘めた若者である。だが彼は未だ自らの生まれの価値に気づかず、胸の火に“願い”的焚き木をくべることができずにいた。

彼の名はハクスイ。

今はまだ、ただの少年である。

(一体なんだつたんだろうな……)

まぶたの裏に、少女の機鎗光が焼きついていた。なにを間違つた

のかはわからないが、あれほどの中少女に「ドMにしてください」と懇願されたときの衝撃はしばらく忘れないだろうと思つ。

ハクスイが制服に着替えて廊下に出ると、そこにはヴィエが待つていた。

フィノーノ高校の制服は、清楚な水色と白のチェック柄のスカート、それに真っ白なブラウスという組み合わせだが、ヴィエが着る女性的な色香が感じられた。ただ俯きながら、けだるそうに廊下の壁に寄りかかっているだけなのに、まるで絵画のように映えている。

ハクスイはつまらなそうに俯いていた彼女に声をかける。

「誰か待つてんのか、ヴィエ」

「……ハクスイをよ……ひとりで怒られたくないもの」

「揃つてたら二倍叱られるような気もするが……」

ふたりは再び揃つて廊下を歩き出す。

「友達が言つていたんだけど……実技の授業で全員抜きを果たしたのつて、フィノーノ高校の長い歴史でも、前代未聞で……だから、つまり、ハクスイとわたししかいなつていつの

「へえ、俺たちす、」こととしたんだな」

「常識的ではないつていうことじやないの……？ 他の人に点数とか、つけにくくなつちゃうのよ。だから、謝つたほうが良いと思うんだけど……」

「それは……まあ、悪いことしたかもな」

本日の試験全科目が無事終了し、賑わい出す校内においても、ハクスイとヴィエが並んで歩く姿を見た生徒たちは、次々と道を譲つてゆく。ヴィエのあまりの美しさに気圧されて、とかそういうわけ

ではない。皆が避けているのは、“魔天”のハクスイの方だった。

学園一の美女とも呼び声の高いヴィエが、なぜそんなハクスイとまともに付き合っていられるのかと云うと、それは単に幼馴染だからという以外にも理由があった。それはともかくとして、足を進めていた彼女は人目のなくなってきた辺りで、唐突に回れ右をした。

「やつぱり、帰るの……」

「なんでだよ」

ハクスイはすかさずヴィエの手首を掴む。

「だつて、悪い知らせに決まっているもの」

「そりやそりやうけど、度合いがあるだろ。聞いてみなきやわからねえよ」

「退学かもしれないの……」

「武術の授業でベストを尽くしただけで、なんで退学にさせられるんだ……」

ハクスイとの差は、頭半個分もないだろう。女性にしては長身である。特に、頭の小ささと足の長さが、彼女の容姿のバランス感を非常に美しいものとしていた。胸の小ささも、そのモデル体型により、同性にはむしろ美点として見られるだろう。目を伏せると、水晶のように切れ長な蒼い瞳が、光に反射してきらきらと輝いていた。彼女の中身を知らない生徒たちの中には、バージンスノウのような透き通る肌を持つヴィエに、憧れの眼差しを向ける男女も少なくはない。

だが、ヴィエはハクスイが呆れるほどに、凄まじく後ろ向きな性格をしていたのだ。彼女の澄ました表情はとうに剥がれ、童女のような素顔が見え隠れし出した。

「もしかしたら、死刑かもしないの……！」

「天使の国、天ツ雲^{エルティバ}に死刑制度はないぞ」

「わたしにだけ、適応されるかもしないの……」

「俺が言つのもなんだが、悲観的もほどがあるぞ、ヴィエ」

すると、こういった場面では決まってヴィエの声は震え出すのだ。
「ハクスイひとりで聞いてくれればいいのつ、わらしほおうち帰る
ものつ」

「待て待て待て待て」

ハクスイの制止もやむなく、完全にテンパつて舌足らずになつた
ヴィエは、全力で逃げてゆく。そんな彼女を、ハクスイもまた必死
の形相で追いかけて捕まえる。

「手間取らせんじゃねえ！」
「ら～～～め～～～～～！」

捕獲後、ハクスイは泣き叫ぶヴィエの腕を掴み、無理矢理引きず
つてゆく。そういう光景もまた、ハクスイの『噂』を助長するも
のに違ひなかつた。

ヴィエの癖は、幼少のときからまったく変わつていない。彼女は
少し焦ると、すぐに口が回らなくなるのだ。誰にも見せない美女の
破綻も、ハクスイはもう慣れたものだ。ヴィエを引きずつたまま職
員室へと続く廊下を進む。

「はいはい、ハクスイ、入ります」

そうして職員室のドアをノックした途端である。ヴィエはなに
やらジヤンパーのファスナーを引き上げるように、シユツと外見を

取り繕つた。

「……失礼しますの」

見事に美女の皮をかぶり直し、ヴィエは会釈しながら入室する。その徹底した自身のイメージ戦略の見事さに、小さなため息をつきながら、「ちす」とハクスイもあとに続いた。

並んだ教員机の向こうには、先ほどの試験担当教使であり、学年主任とハクスイたちのクラスの担任を兼任するシュレエルが険しい顔で待っていた。

声も眉も潜めて、ハクスイとヴィエが囁き合つ。

「やっぱり怒つていいよな」

「人に迷惑をかけることしかできないものね、わたしたち……いいの、早めに謝るの」

つくや否や、挨拶よりも早くヴィエが頭を下げた。

「先ほどの授業は、申し訳ございませんでしたの」

「やりすぎじゃまいました」

ハクスイとヴィエが謝罪すると、シュレエルは外面を一変し、「いやいや」と手を振つた。

「そういうことではないんだよ。確かにありや困るが……別にそんなのは、負けたやつが次頑張りやいい。じゃなくてな、お前らの話だよ」

「わたしたちの……？」

ハクスイとヴィエは顔を見合わせた。その枯れた表情もまたまるでないと一部の女子生徒には評されるシュレエル教使は、こめかみをかく。

「念のため確認をしておくけどな、一応お前たちも、この養成学校に入学したってことは、彩光使セーラフイを描しているんだよな」

「ええ」「まあ」

ふたりは曖昧につなぎいた。

「……本当にか？」

教使に胡乱な目を向けられる。

「なれるものなら」

「目指すだけなら、誰にも迷惑をかけませんし」

「悪魔を絶滅させてやるのが、俺の遠い夢ですから」

「入学した当時は、わたしも希望を抱いていましたの……」

シュレエルはため息をつく。

「本当にネガティブだな、お前たち……胸を張つて言わないのか？
天使なら、憧れだろ？ 彩光使は。先生だつて昔はなりたかつた
んだぞ」

「じゃあ諦めて教使になつたんすか？」

「教使こそが俺の生きる道だと気づいたんだ！」

図星だつたのか、ハクスイの言葉にシュレエルは思わず声を荒げた。が、すぐに冷静さを取り戻し、短い髪を撫でた。

「あのなあ……そこでお前たちに言いたいことがあるんだ。期末試験も終わつた今、少し早いが、進路の相談だ。来年はもう二年生だろ？ ちゃんと真面目に答えるよ」

「彩光使は無理だから、キッパリ諦めて学校辞めろつてことすか？」
「それを言われたら、どうしようもないの……明日からなにして生きていこうかしら……」

「違う！ 勝手に話を進めるな！」

シュレエルは机を叩いて、強引にふたりの妄想を止めさせる。

「お前たちの武術で彩光使にならないのは、勿体無いと言いたいんだ！ 天ツ雲・フィノーノの損失だぞ！ あのな、彩光使に必要な資質は多く存在しているが、先生は第一に自分の身を守る力だと思

つていてる。どんなに仕事ができる彩光使でも、悪魔にやられてしまつたらそこでおしまいだろ。だから、武術ほど大切なものはないんだ。どんな彩光使だって、学生時代にクラス全員抜きなんてできなかつたのに、お前らつてやつは……！」

「はあ」「わたしたち、そんな大したものではないですの」謙遜のかネガティブなのか、ふたりはとりあえず顔の前に掲げた手を横に振る。

「いい加減にしろよお前ら、そんなんだから、機縫光がないんだよ……良いか？ 彩光使に必要不可欠な機縫光のボーダーラインは、大体上位20位までだ……んだが、これ、見てみる」

シユレエルに渡された紙には、ふたりの機縫光試験の学年順位が、いち早く記載されていた。ハクスイ、161名のうち、161位。ヴィエ、161名のうち、160位。

「ははあ、まあ、そうでしょうね」

「いつも通り、こんなものですの」

「納得しているんじゃないぞ！ 機縫光の成績の悪さで中退にさせられることはないが、逆立ちしたつて彩光使になれるような点数じゃないからな！」

もはや何度もか、息を切らせたシユレエルは、はあ、とため息をつく。

「だからこそ、先生はお前たちに適切な指導を心がけるつもりだ。先生はお前たちをどうしても、彩光使にしてやりたいんだ。それだけはわかってくれるよな？」

「すごいっす先生。熱血っすね」

「立派だと思いますの」

「他人事かお前ら！…………つたく、もういい……先生が勝手に決めてやつたからな、一応お前たちに話を通そうかと思った俺がバカだつたよ。まず、ヴィエくん」

ショレエルは机の下から取り出した書籍を、次々と積み上げてゆく。五冊、十冊、十五冊、二十冊……本はヴィエの腰ほどまでに重なった。その塔を眺めたヴィエは顔をしかめる。

「…………なんですか？」

「機縁光を高めるための自己啓発書だ。色々なバリエーションをな、中央図書館に行って借りてきてやつたんだぞ。もちろん問題集もある。色々な教使に相談してな、全てがオススメの一級品だ」

「…………学校の授業で、行なつてますけれども」「その四十倍の量が宿題だ。ヴィエくんには、とにかく数をこなしてもらうことにする」

「…………効果があるとは思えませんけれど、わたしなんかには」「ちゃんと読んでおくんだぞ。きょうから自由時間はないと思つてくれ。で、だ」

無茶な命令に固まるヴィエを置いて、ショレエルは椅子の向きを変えてハクスイを見やる。

「ハクスイくんに關しては、もうお手上げと言いたいんだけどな」「どうも長い間お世話になりました」

「待て待て！冗談も通じないのかお前！頭を下げるな立ち去ろうとするな！いいから、先生は考えたんだ。ヴィエくんには量の課題、そして、ハクスイくんには質の課題だ」

とりあえず本を一冊掴んで開いていたヴィエが「質……？」とつぶやいた。ショレエルは自信を男臭い笑みに変えて、人差し指を立

てる。

「ああ、もし効果があれば全国で機縫光不足に悩む生徒たちへの対応策ともなるだろ？ そのための、いわばテストケースだな、お前たちは。全国のみんなのために、頑張ってくれよ」

「はあ」

「わたしは、わかりましたけれど……ハクスイは、なんですか？」

「質の課題はな、特別教使だ。個別に、ハクスイくん担当でな」

「それはこの俺だ！ とか言っちゃう感じすか？」

「シュレエル先生は確かに良い先生だけど、堅物だからふたりっきりはちょっと……」

「言わんよ。というよりも、なんだ今のヴィエくんの発言は。正面から陰口か？ 斬新だな。まあいい」

大人の潔さで諦めると、シュレエルは喉を鳴らしてから告げてくれる。

「お呼びした先生は、なんと彩光使の方だぞ」

『彩光使……』

ハクスイとヴィエの声が揃つた。

「そうだ、驚いただろ。おっと、俺はそろそろ授業が始まるから行くから、ハクスイくんはここで待つてろよ。頼んだ方は、彩光使の仕事が終わり次第、駆けつけるって言ってたからな」

「彩光使の人気が、直々に、か……？」

「ハクスイに……すごいの」

ヴィエは口元に手を当てて目を見開いている。齡十六にして不惑の境地に至るハクスイですから、黒瞳を大きく揺らしていた。

そもそもこのフィノーノ高校とは、彩光使を養成するために設立された学校である。この学校に通う全ての生徒が彩光使を目指し、彩光使に憧れ続けているのだ。それはハクスイやヴィエ工であつても、例外ではなかつた。

「ちょっと、見てみたいかも……」

誕生日プレゼントを待つ幼女のよつて目を輝かすヴィエに、シュレエルは冷たく言い放つ。

「お前は補習だ」

「えー……」

「いいからいくぞ、ヴィエくんにはとにかく量をこなしてもらうからな。ほら、持てるだけいいから持つて。じゃあな、ハクスイくん、くれぐれも失礼のないようにするんだぞ」

「ま、前が見えませんの……」

ヴィエに次々と本を抱えさせて、ふたりはチャイムに追い立てられるように部屋を出てゆく。待機を命じられたハクスイは、一気に人口密度の薄まつた職員室で手持ち無沙汰に頬をかいだ。

「彩光使……本物の、彩光使か……なんか、突然すぎて、夢みてえだな……」

彩光使は天ツ雲で選りすぐりの戦闘員だ。その素晴らしい機縛光により数々の光輝武装を使いこなし、悪魔という悪魔を殲滅する神の使徒だ。彼らは小学生から高校生までなりたい職業ナンバーワンを独占し、いわば天使たちの象徴的存在として輝き続けている。ハクスイのような見習い学生天使とは格が違う上に、中央庁から支給される給金も、教使とは桁が違う。

「一体どんな人が……来るんかな……」

テレビで目にする彼らは、美青年であったり、知的な女性であったり、仕事ができそうな大人といったイメージが強かつた。あまりの緊張に手が震えてしまう。失礼がないように、などと真面目に考えすぎると意識が遠ざかってしまうそうだ。

「……み、見放されないよ、アリス、しねえとな……」

ヴィエ工ではないが、悪い想像が頭の端に浮かんでしまう。少しの間ひとりで待つていると、静まり返った校舎で、遠くから慌ただしい足音が響いてくるのが聞こえてきた。

(来たか……?)

身体が石になりそうだ。常に俯きがちの無表情で過ごしているよう見えるハクスイであるが、その実はひどく慎重で謹厳である。前向きにも後ろ向きにもなれない彼は、幸運を感じることができない。己の行動が全てなのだ。だからこそ、その双肩にかかるプレッシャーは尋常ではない。

様々な受け答えを想定しつつも待っていると、勢いよく職員室のドアが開け放たれた。

「おまたせ!」

満面の笑みとともにやつてきたのは、思い描いていたとはまったく異なる人物像で……

彩光使は華奢で小柄な美少女だため、ハクスイは一瞬、学生が教使に呼び出されたのかと思った。それに、彼女の顔に見覚えもあつたのだ。

「……あれ、お前は……？」

彼女は廊下で叫んで去つていった、ふわふわの金髪の美少女だった。

少女はこちらを指しながら、大きく口を開いたまま「あ」を連呼していた。その表情が、コップの水に朱を差したよつて、少しずつ、少しづつ染まってゆく。

「あつ、あつ、あの、あつ！」

互いに見つめ合つて」としばし、まるで観念したかのように、少女は名乗つた。

「は、は、はじめまして……！　せ、彩光使だよー。」

「じゃ、じゃあ、あたしから血口紹介するね」
場所を変えてから、彼女はそう言い直した。溢れる機縫光が彼女の肌から清光のように放たれ、輪郭がぼやけたショートカットは、近くで見るとタンポポの綿毛のように柔らかそうだ。

「あたしはルルノ。好きなものは恋愛話で、嫌いなものは悪口。よく人からは脳天氣だつて言われるけれども、ちゃんと悩んでいることだつてある身近な高校一年生だよ。これからよろしくね！ あたしも頑張るよ！」

ハキハキとした耳心地の良い声だつた。美少女というのならば、ヴィエも引けを取らないだろう。だが彼女は、それに加えて暖かな機縫光と人柄を兼ね備えているようだつた。

色々と彼女に聞きたいことはあつたものの、主に初対面のときの奇言について、ハクスイはとりあえず頬をかきながらつぶやく。
「……そういや、史上最年少で、彩光使になつた優秀な天使がうちの学校にいるつて、聞いたことがあつたつけな……それが、ルルノ……さん、だつたのか」

「あたしのことはルノでいいよ…… 同い年だし、敬語もいらないし、遠慮もしないでね！」

ルルノノは背伸びをするように、親指を突き出してくる。
「いや、しかし……」

相手はなんといつても、あの彩光使なのだ。天使たちの永遠の憧れにして、地上の平和を守る暁の兵士たち。いくら見た目が子供っ

ぽいからといつても、自分と同列に扱うなど。

「あたしが良いって言っているんだから、良いじゃん！ ね？ ね？」

だが、そうまでして笑顔を押しつけられると、ハクスイはそれ以上言い返すことはできない。強弁するのはなおさら相手に失礼だろう。

ふたりは生徒指導室に移動して、向かって坐っていた。

わざかに逡巡した後、それならば、とハクスイはルルノノに従つた。
「わかった、ルノ。俺はハクスイだ。まあ、呼びやすいように呼んでくれ」

「おっけー！ それじゃあ、こーゃんと呼ばせてもらひねー。」

ハクスイはコケかけた。

「それおかしくないか？」

「呼ばせてもらわざるをえないね！」

「なんでだよ、誰かに命令されてんのかよ」

詳しく問うも、ルルノノは意に介していない。

「シュレエル先生から頼まれてね、にーやんの機縫光を覚醒させてやつてくれつて！ ふふつ、そのために、お手伝いをさせてもらつよー！」

「いや、その、悪いな

「人の役に立つのが彩光使の仕事！ お安い御用さー。」

張り切つて、ルルノノは小さな胸を張る。可憐な容姿に反して、いちいち所作が男前だ。

「なあ、とりあえずままずひとつ聞いてもいいか？」

「なにかな！ 言つてごらん言つてごらん！」

「その、さつきの更衣室前での、『ドミにしてください』って、あれなんだつたんだ？」

その瞬間、彼女の身体がぴかつと光った。

「つおつ」

まるで田ぐらましのよつだ。一瞬のフラッシュに驚いていたと、ルルノノの顔が徐々に赤く染まってゆく。

「そ、それはつ……！」

なんとなく、しまつたかな、とハクスイが心のなかで反省していると、ルルノノの髪からぱりぱりぱりと螢光がなびく。

「いつ、今は彩光使だから、あたし！ か、関係のない話は、謹んでもらおうかな！」

「そ、そつか……」

頬杖をついて気難しそうな表情を演出するルルノノに、若干気圧されてしまつ。どうやら、謎は謎のまま先送りにされてしまうようだ。

「……だ、だから……その話は、また、あとで……」

「ん？」

「な、なんでもないなんでもないよ！ 追求したりやだめだつてば！ き、気にしてたら不幸になっちゃうよー！」

不幸にはなりたくないかったので口をつぐんでいると、ルルノノは何度も繰り返しうなづいていた。

なんとか自分のペースを取り戻したらしい彼女は、ファイルを片手に口調を改める。

「そ、それでは、「ホン……えー、にーさんはフィーノーー高校二年生。子供の頃から彩光使を目指していく、そのためには稽古に励んできた武芸は、同じ学年に並び立つものはいないどころか、十年にひ

とりの逸材と言われていて……」

「ちよ、ちよつと待つてくれ。それ誰が書いたんだよ」

ファイルから出した内申書のようなものを読み上げるルルノノに、思わず手を伸ばす。

「え、シユレエル先生だよ」

「そうか……だつたら早く短所を読み上げてくれよ……上げて落とす氣か、畜生！」

「べ、別にそんなつもりはなかつたけど……ええと、勉学の成績も優秀、それでいて何事にも真剣に取り組んでいるため、教師からの信頼は厚い。しかし、その彼の欠点は機縫光の欠如である。彼は天使の力の源である機縫光を、入学当時から“1ポイントも持つてい

「……まあ、そういうわけだよ

それがどれほどに異常なことなのか、ルルノノはわかつているだ
らう。

「そつか、なるほどねー」

「なんか軽いな！」

いや 機知が無い人なんて初めてだから ちよとひくい

ああそうなのが、驚いていたのか？

彼女は金髪の巻き毛を搔でくるくると弄り出す。

「機械光つていうのは、どの天使も持っている、不可能を可能とする能力のことだよね。それがゼロつていうのは、どうこうことなんだろう?」

「俺もよくわからねえんだけど、面倒を見てもうひてこるお医者さんの話では……“どうして生きてこらのかわからぬ”だそりだ」「なるほど……」

「機縫光がない天使は飛べない。光輝武装を使えない。もつと根本的なところで言うと、天使としての体を維持できない。ただの小さな火になってしまふ。……って、世の中では信じられているみたいだしな」

ハクスイの目に光沢がなく、“魔天”と噂されているのも単純な話だ。彼には機縫光が一切ないのだから。

天使が当たり前に持っているべき機縫光を瞳に映すことができないため、まさしくブラックホールの眼窓である。

「うーーーん、それはちょっと、大変なこと、だよねえ」

「ちなみに、彩光使のルノはどれくらいの機縫光があるんだ?」
知識としては、ハクスイも知っている。

ひとりの学生が出力する平均の機縫光は500ポジ前後であり、彩光使になるための条件はその二倍、1000ポジの壁を越えなければいけない。そして、数万、数十万の天使が生活する天ツ雲を空に浮かべるために必要な機縫光は、合計500万と言われている。

「あたし? あたしはこないだ計測した値は、300万だったかな」
ハクスイは噴き出した。

「……マジか」

そんな数値は、教使はあるか、教科書ですら見たことがない。彩光使としても、異常なのではないだろうか。

「まあでも……機縫光がないから身体が悪いってわけでもねえし、テストの総合評価は落ちるが、こうして高校にも通えている。今通院しているとこの病院代は、なんか中央庁の偉い人に負担してもらっているし……ただ、彩光使には、なれねえな」

そう言つと、ルルノノは真剣に考え込んでいた。

「そつか、なるほど、なるほどね……なるほど……」

ハクスイは普段通りの暗い目で、窓の外の校庭を眺める。これだけは本当にどうしようもないとなのだと、ハクスイは諦めているのだ。

「迷惑をかけて、悪いな。シュレエル先生も、手がつけられないってんで、ルノに押しつけたんだろ」「その途端だ。

「そんな言い方をしちゃダメだよ！」

笑顔ベースの表情を保っていたルルノノが目を吊り上げてピシャリと言い放つてきたので、ハクスイは少し驚いた。

「機撰光を高めたいんだよね、にーさんは。なら、あたしに任せてよ！」

「だけどな……医使だつて、サジを投げそうになつてんのに」

機撰光を高めることは、非常に困難だ。心や想いなどといった目に見えないものを変えるためには、性格の矯正すらも必要となる。それですら、確実とは言えないのだ。反復するだけで身につく武芸や勉強とはわけが違う。生き方が変わるようある日突然の衝撃で跳ね上がることもある。火で形作られている天使の原動力は、あまりにも不安定なのだ。

だがルルノノは自信満々に言つ。

「エンジェル大丈夫！」

「……なんだ、それ」

「あたしの中で流行つていいる謳い文句だよ！ エンジェル大丈夫！ 天使の問題なんて、ほとんどは気合で解決するんだから！」

「そ、そうか、シンプルでいいな」

ルルノノの爽快な笑顔を見ると、ハクスイですら信じてしまおつかという気になつてしまつ。

「……なら、頼む」

今までさんざん向き合ってきた問題だ。もつ他に頼れる人はいないのだから。

「あたしが、にーさんを立派な彩光使にしてみせるとも…」
心地良い断言であつた。ルルノノは胸を叩き、それから人差し指を立てた。

「個人の機縁光を伸ばすためには、その人のことを知る必要があるのさ！ そのために、にーさんがどんなときに幸せを感じるか、お聞かせ願わざるをえないね！」

「……幸せ？」

ハクスイはその言葉を初めて聞いたような顔をした。

「俺か……俺は……」

「そ、そんな深刻に考えこむよつたことじやないと思つたび（……確かに、考えてみれば、悪魔を倒すことは俺の目的であつて、幸せとは関係がない気がするな……幸せ、幸せか……そういうや、ヴィエも確かにあんまり幸せそうじやねえしな……）

ハクスイがなにも答えずにいる、ルルノノは熱弁を振るう。

「幸せなことがあるよ！ たくさんあるよ！ ジャなかつたら、機縁光なんてないよ！ 友達のコイバナ聞いたりとか！ 休日に一度寝しているときとか！ 人の笑顔を見たときとか！ なんでもないことが幸せに思えることが、一番の幸せだとあたしは思うんだ！」

「それは……あるかもな」

どうやら問題はその辺りにあるのかもしれない、ハクスイは思つた。

「なにをやつても幸せと思えないよりは、確かに、マシだ。ものすごく、マシだ」

「違うよー、それは違うよー！ なにをやつても、って、にーさんは

まだなんにも体験していないじゃないかと、言わざるをえないよ。」

「……そり、なのか？」

「なによりもまず、刺激！　ふふつ、あたし良いことを思いついちゃつたよ！」

ルルノノは口元に手を当てて、無防備な笑顔を覗かせた。見る人が見たら、彼女は自分に惚れていると思い込んでしまいそうな、透明感のある瑞々しい笑顔だつた。

その時、どこかすぐ近くから「ワワー」という小さな喝采が響いてきた。

「な、なんだ？　誰だ？」「ええ」

「ああ、強い機縕光を發揮するとね、溢れた力が音や声に変化するのはよくあるんだよ」

「ま、マジかよ、当たり前のことなのか、これ……すげえな、機縕光って、すげえな……さすが彩光使だ。シユレエル先生とは違う」

ルルノノは部屋に飾られている時計を眺めて「もう三時があ、早いほうがいいな」と独り言を言つてから、ハクスイに向き直る。

「あのさ、にーさんつて、これから時間あるかな？」

「これからか？　あ、ああ……試験はもう全部終わつたし、家に帰つてからも特になにもないから、きょうは一日暇だが」

よしそ、トルルノノは指を鳴らした。他人のことだというのに、こちらまで感情が伝染してきそつなほど、喜んでくれているのがわかつた。

「ふふつ、それじゃ、準備が済むまで校庭で待つていもらえるかな！　幸せを見つけられないにーさんに、目にモノを見せてあげるよ！」

「あ、ああ……よろしく頼む」

～

それからしばらくの間、ハクスイは制服のまま、授業中でがらんとした校庭で待ちぼうけをしていた。ルルノノと別れてから、もう一時間近い。忍耐強く我慢していたハクスイがしごれを切らし出していた頃だ。突如として、空から強風が吹きつけてきた。

「……ん？」

見上げれば、上空から一艇の白銀の船が降りてくるではないか。

「ありやあ……機方舟か……？」

機方舟は彩光使の象徴だ。一対の翼の生えたその流線型の丸いフォルムは、格好良いというよりは可愛らしく、どこか白いハトを彷彿とさせるような平和的な乗り物に見えた。

授業中だというのに、校舎の窓から生徒たちが首を出して騒いでいた。校庭に立つていなければ、ハクスイもあの中に混じっていただろう。機方舟はゆっくりと校庭に降りてくる。まるで空気の抜けた風船が地面に帰つて来るような、優しい着地であった。

ふつんと翼が消えると、両手を掲げるよつて両側のハッチが開く。

銀色の機体の中から現れたのは、衣装をチエングジしたルルノノだった。学校の制服ではなくなつていたルルノノの格好は、テレビや写真でしか見たことがなかつた彩光使としての正装であった。金と

銀の飾り糸が丁寧に縫いつけられた、真っ白な外套だ。

「にーさん、ちょっと時間がかかっちゃったね！」「めんね、ごめんね！」

「……一体これは、どうしたことなんだ？　事情がまったくわから
ないんだが……」

「ふふつ、決まっているじゃないか！　下界に行くんだよ！」

面食らつてすぐには言葉を返せないハクスイは、「下界……？」
とオウム返しにつぶやいた。そんな彼に、ルルノノは手に持つてい
た紙を突き出してきた。思わず、読み上げる。

「下界渡航免状……？」

「さつきね、フィノーノの中央庁に寄つて、発行してもらつてきた
んだよ！　ほら見て、学生一名つて書いてあるでしょ？」

「……ああ、確かに、書いている」

「あたしは今の仕事に幸せを感じているからさ、彩光使の仕事を実
際に見てもらうのが早いと思つたんだ！　人の笑顔を見れば、に一
さんも幸せを感じてもらえると思つてね！　ふふつ

「なんと……」

生で彩光使の活躍が見れる。それは彩光使候補生にとつては、夢
のような幸運に違いない。だが、だからこそハクスイは尻込みする。

「でも、それは、その、良いのか？　俺みたいな天使がほいほいと、
気軽に地上に降りてつたら、なんか、問題とか、起こらないのか？」
「エンジエル大丈夫！　だつて監督責任者のあたしがついているん
だもん！　こう見えて、あたしは一人前の彩光使なんだからね！
ふふつ、心配いらないって！」

300万の機鎧光を持つ美少女の笑顔に、まるでハクスイの暗闇

のよつな憂慮も吹き飛んでしまつようだ。ハクスイは胸元を押さえ
る。火がほんの少しだけ疼くように揺らいだ気がした。

断りうという気持ちと、行ってみたいという気持ちが衝突し、さ
らに音を立てて燃え上がった。

ハクスイはうつむいていた顔をゆっくりと上げ、ルルノノにうな
ずく。

「わ、わかった……なら、行こうか」

「うんっ、乗つて乗つて！」

ルルノノに手引きされてハツチの中に足を踏み入れる。前面が巨
大スクリーンになつており、その前に備えつけられているのが操縦
席だらう。後ろは座席と荷物置場のようだ。だがそれよりも目につ
いたのは、簡素な室内のあちこちに貼られている、太文字で書かれ
た標語だ。

『為せばなる。為さねばならぬ、何事も』『人生は道』『限界に限
界はない』『なぜベストを貯へたくないのか』『ネバー・ギブ・アッ
プ』『人生を諦めない』

ハクスイは慄然としながら顎に手を当てた。

「……この機方舟、お前のなんだな」

「お、よくわかつたね！　ふふふふ、ルルノノ号さー！」

「名前はともかく……自家用機だなんて、すげーな」

ルルノノは操縦席に陣取り、機体のMの字型のハンドルを握る。
音も立てずにハッチが閉まる。ハクスイはとりあえず、その後ろの
座席におつかなびっくり腰を下ろした。

「よし、じゃあ、行くよー！」

「お、おつ……うわ！」

空を飛んだ」とすらないハクスイは、突然の浮遊感について叫び声を上げてしまつ。

「ちゃんとシートベルト締めてねーー！」

「そ、それはどこにあるんだ……」「これか？ よし、つけたぞ」

「さ、あとはお空の旅を満喫していよっ」

「おおうっ」

すると先ほどまで操縦席に座っていたルルノノが、気持ちよさそうに手を細めて伸びをして、責任者の座るべき席を離れた。ジャンプして、ハクスイの隣の座席に腰を下ろしてきたのだ。

「お前、運転は……」

「ああ、これはもう、ボタンひとつでピッピッピッピッの自動操縦だよ」

「そ、そうなのか」

「あはは、だつて、あたしじゃ運転はあるか、着地も発進もできな
いもん」

「下ろしてくれ、頼むから俺を下ろしてくれ」

戦々恐々としたハクスイの言葉を冗談と捉えたのか、ルルノノはまたも「あはは」と能天気な笑い声をあげる。普通の天使なら気にならないような上下左右の細かな揺れも、己の翼で飛んだことが一度もないハクスイにとっては自分の身体を襲う大きな違和感であった。

「えつ、平気だよ、自動操縦は万全なんだからー！」

「でも、天使が操っているわけじゃないんだろーー。自動だなんて、
なにが起きるかわからないじゃないか！ 怖いだろーー！」

「だ、大丈夫だつてば、にーさんは心配性だなあ……そんないつぱ
いいっぱいにならないでも」

初めて聞いたハクスイの怒鳴り声に、ルルノノはたらりと汗を流

しながら、両手を振る。それからあさつての方向を指さした。

「あ、ほら、にーさん、見てみて！」

「な、なんだよ、標語のひとつを読み上げても、俺には何の効果もないぞ……つて」

ルルノノが差したのは、機方舟の壁面に張りつけられた透過モニター ようするに右の窓であった。睨むように視線を移動させたハクスイが、息を呑む。

そこには雄大な天ツ雲が浮かんでいたのだ。下界の人々には見ることができない、雲の上に浮かぶ国である。世界の十七箇所に点在するうちのひとつ、極東にある天ツ雲・フィノーノの姿であった。

この瞬間だけは恐怖心も忘れたように、ハクスイは果然と偉大なる雲の国眺めていた。

「すげえな……下から見ると、やつぱり、そこらの雲と見分けがつかねえんだな……」

「ふふつ、果たしてそうかな！ 田を凝らして」「らんよ！」

「ん？ ……あ、機縛光か」

ハクスイは雲から発せられる威光に気づいた。そう意識すると、雲全体が光り輝いているのが見て取れた。あまりにも大きな天ツ雲が光を放つ様は、まるで第一の太陽のようであった。

「すげえ……」

「人間がお日様とかお月様の光を浴びると気持ち良いとか、幸せだとか、そういう気分になるのはね！ ふふつ、天ツ雲が空に浮かぶために放出している機縛光を、たつぱり浴びているからなんだよ！」

「へー……すげえな……」

ハクスイが堂々と浮かぶ天ツ雲の姿に見入っていると、いつしか、重苦しさや心細さはなくなっていた。あるいはそれは天ツ雲のように機撰光を絶え間なく発するひとりの美少女が、ハクスイのそばでとても楽しそうに笑っていたからなのかもしれない。

「ほらほら、にーさん、見えてきた見えてきた！」

ルルノノこそが初めて機方舟に乗ったかのように明るくはしゃいでいる中、ハクスイは彼女が示す先を眺めて、感慨深い気持ちに浸る。

「あれが、地上なのか……」

小さい頃から名前だけは知っていた世界だ。彩光使にでもならなければ、一生行くことはないと思っていた光景が、人間の住む世界が、ハクスイの眼前にはいっぱいに広がっていた。

（）

夕暮れに染まる地上に、機方舟は降り立つてゆく。ハツチが開くとともに、ルルノノは勢い良く立ち上がり、ハクスイの手を引いてきた。

「さ、いこいこいこい、にーさん！　お楽しみの時間だよー！」
だが、ハクスイはすぐには動かない。気になることがあるような顔で、手を広げた。

「俺は、この格好で大丈夫なのか？　いや、その、普段通りの学生

服だろ？ 人間に見つかったり、しないのか？」

「あはは、大丈夫だよ！ これから先はどうなるかわからないけど、今の人間の神靈力じや、あたしたちは見えないよ！ セイゼイラッパの音が聞こえてくる気がするなー、程度だよ！」

「そ、そうか？ それならいいんだが」

ルルノノは荷物置場にあつた小さなトランクを持つと、ハツチから飛び降りていった。ハクスイもその後に続くと、コンクリート作りの巨大な建物とそれに差しかかる西日が目に入った。

「ん……ここは、学校、か？」

「そうだねー。中学校かなー？」

大きな建物の裏手に降りたようだ。緑のフェンスに囲まれていることから、校舎裏の空き地なのかもしれない。ルルノノとともに、ハクスイも辺りを見回す。

「下界つつたって、天ツ雲とあんまり変わらねえんだな……」

「そりゃあそうだよー、天ツ雲の文化は、人間さんの世界から輸入されているんだからね」

指を立ててしたり顔で語ると、ルルノノは「さてと」と一旦トランクを置き、手首に身につけていた光の輪を、自分の頭の上に浮かべた。

「この光導輪（サクセフ）は、市販のものと違う、彩光使の特別製でね。困つている人を見つけ出して、そのネガティブなオーラを感じすることができますよ。大体の場所は、機方舟にインプットしていただけれど、もしかしたらどこかに行っちゃつたかもしれないからね、現地に着いてからはこれで探すんだ。えと、困つている人はどこかなあ」

「あれか？」

ハクスイが指差す先、校舎裏の奥まつた日陰に、男子と女子が立

つていた。トランクを抱えて駆け寄つてゆくルルノノに、ハクスイも続く。

フィノーノ高校の制服に似た、白いワイシャツと、水色のスカート、あるいは黒のスラックスだ。男子生徒の方は黒髪を短く刈り込んでいて、童顔な少年だった。少女もまた黒髪をストレートに長く伸ばしていて、大人しげな風貌に、顔を真っ赤に染めて俯いていた。

「あ、そうだね！ 生徒さんっぽいね！ きやー、初々しいねー！」
「なにが初々しいんだ？ 緊迫した雰囲気だぞ？」

「ふふつ、まあまあ、話を聞いていればわかると思うよつ」

疑問の目を向けるハクスイに対して、ルルノノはなぜだかとても嬉しそうだ。

「困っているのは、どうやら、女の子の方みたいだね」「あの黒いもやもやが、そうなのか？」

なにやら氣まずそうに固まつたまま動かない中学生の少女の身体からは、黒い粒子が立ち上つていた。まるで薄い霧に包まれているように、姿がぼやけてしまっている。

「そうだね、あれこそが、機鎧光と対極をなす存在の力、冥混沌(ネガルガ)だよー」

「落ち込んだときに、発生するんだな」

「うん。天使にとつては猛毒だし、これに包まれると、とにかく暗いことばっかりしか考えられなくなるんだよ！ それが発生する理由の半分は、人間さん自身に原因があるんだけど……」

「もう半分は、悪魔の仕業なんだな」

「そうだね！ にーさんつてば物知り！ 天才！ エンジェル！」

「小学生でも知つてつからな……」

ルルノノに賛辞の視線を向けられて、ハクスイは頭をかく。むし

ろバカにされている気分だ。

「IJの子たちの場合は、どちらに原因があるのかわからないけどさ、でもどっちでも、困っているならあたしたちが冥混沌を祓わなきゃね！」

そう言つと、ルルノノは持っていたトランクケースを地面に置き、蓋を開く。中には、小さな黄金のラッパが収まっていた。

「人間に機撰光をプレゼントするときには、機撰光放出の増幅装置である特別なラッパを使うんだよ」

金ピカのラッパを持つて、ルルノノは真っ白な翼を背中から生やした。ピカピカに光る、機撰光の発現だ。それは昼に見かけたばかりのクラスメイトのものよりずっとキレイで、厳かであつた。光導輪に、翼、小さなラッパ、そして真っ白な衣装といい、これでどこからどう見ても、下界で信奉されている天使の姿である。

「じゃあ行くよ

」

ルルノノはそつ言つてから、ラッパのマウスピースに桃色の唇を近づけた。
音が飛び出す。

ルルノノが吹いているのは、学校の音楽の授業でも習う、応援歌^{チャント}の代表的な一曲だ。『恋人たちへの愛餐歌^{アガベー}』は小学生でも知つているし、何人の歌手もカバーしている人気曲だ。しかしルルノノの鳴らす音は、今までに聞いたどの歌とも違つていた。

（これが本当の、応援歌なのか……これに比べたら今までの応援歌なんて、ただの音の集まり、だな……）

ルルノノがラッパを鳴らすことに、少女の辺りを覆う冥混沌が晴れてゆく。

すぐに少女がまとつていた冥混沌はなくなり、すると今度は、少

女の背中に天使のように小さな白い翼が生えてきたのだ。彼女を包む機撰光が、聖なる形を取つていいのであつた。

まるでルルノノに息吹を与えられた土塊のように、少女は動き出す。

「あ、あの！」

「……は、はい！」

少年もまた、緊張に身を固くしてゐるようだつた。

「じ、実は、ね、あの、わたし、その、前から、あの、瞬くんのことが、その」

「は、はい」

少女の翼が、ふわっと広がつたその瞬間、顔を真つ赤にして、少女は叫んだ。

「好きだつたの――！」

応援歌をBGMに、白い羽が舞う。

羽は少女の身体を離れた途端、靈光に変わり、まるで輝く蝶のように辺りを彩つた。

(……あ、そういうことか)

そこでようやくハクスイは得心した。自分は人間の中学生の告白シーンに居合わせたのだと。

応援を中断したルルノノが、ハクスイの脇を肘でつづいてくる。

「もー、鈍いなあ、にーさんは。男女の機微はね、機縁光と眞混沌のせめき合になのだよー。恋愛での問題が、一番眞混沌が発生しあすいんだからー。」

「悪いな、疎くてよ。でも彩光使つてこなことまですんのか」「やうだよ。だつてほひ、見てみてよ」

男子生徒が、顔を赤らめながら、うなずくのが見えた。

「その……なんていふか……ぼくで、良かつたら、ぜひ……」「えつ……」

少女が自分の口元を手で抑えた。

「ほんとは、ぼくのほひこそ、先に美月ちゃんに、告白しようと思つて……でも、その、先をこられちゃつたみたいで……はは、力ツ「悪いけど……その」

ルルノノはそのやりとりを見て、組んだ両手を頬に当て、じーんと感動していた。

「ほらほら……じつ、にーさん……ー。」

「と詰われても、別に。他人事だしな」

「ぐー、これこそがねー。機縁光を高めるために必要なんだよー。人の喜ぶ顔を見て、自分たちが明日を生きるための糧とするのやー。だからにーさんは暗いままなんだよもうつー。」

怒り切ってしまった。ルルノノは興奮した表情でラッパをハクスイの胸元に押しつけてきた。

「ど、どこつわけでね！　ふふつ、これからこのふたりを応援してみるんだよ！　ぬくぬくはちやんと、人の幸せを願えるよつな男になるんだよ、にーちゃん！」

「……よし、これも彩光使の仕事なんだもんな」

ハクスイの座右の銘は、“やつてみてから後悔する”だ。ルルノに差し出されたラッパを受け取り、マウスピースを取り替えてから、ゆづくりと吹口に歯に当てようとする。

応援歌なら授業で何度もやつてこる。授業の成績も悪くはない。だが、すぐそばに彩光使がいるということで、身を固くしてしまつ。「さすがに、緊張するな……よし、それなら行くぞ」

「失敗は成功の女神！　後ろにあたしが控えているんだから、安心してやつちやつて！」

片腕を突き上げるルルノの応援の直後、少年が頭を下げた。

「ぼくもむしる、美月ちゃん、ぼくからもお願ひできるかな……付き合つて、ほしいんだ」

そこには、ハクスイのラッパが響き渡る。音自体は、非常に滑らかな、綺麗な高音である。よどみがないと言つても過言ではない。これが音楽のテストなら、満点に近いはずだ。

しかしながら、その音から凄まじいまでの暗さがにじみ出でているよつに感じるのは。

パン、とまるでガラスが碎けるよつに、少女の背中の羽が散つた。

「ほえ？」

ルルノノの呆けた声の後に、凄まじい勢いで少女が頭を下げた。

「ア、ア、めんなさい、瞬くん！ 無理！ それだけは無理！」

『え、ええええええええええええええええええ！』

件の瞬くん+ルルノノが、目が飛び出るような表情で叫ぶ。少女の体から、まるで不燃物を燃やしているときのような黒い煙が吹き上がる。

「わたしなんてチビで可愛くなくて頭も悪い女の子となんて、瞬く
んが付き合つてくれるわけないもの！だから、ダメ、無理！絶
対ダメ！やだ！お断りよ！寄らないで！」

その冥混沌が感染するかのように、少年もまた、猛烈な勢いで黒

煙を放出し始めた。

「や、やつぱりだめなんだ……ぼくみたいな何の取り柄もなくて、結局、普通なだけが印象のぼくなんかじや……美月ちゃんと付き合ふなんて夢を見るだけ無謀だったんだ……」

「ああ、『めんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい』、瞬くん……こんなわたしが告白なんて考えちゃったから、すごい迷惑をかけて……ああ、もう、『めんなさい、めんなさい、めんなさい』、なんだつたら土下座しますから、『めんなさい』……」

黒々とした冥混沌が大河のように流れる中、少年と少女は互いに謝り続ける。

て頭を抱えながら叫んだ。

「...」
「...」
「...」

「……うーむ……」

ハクスイは手元のラップを見つめながら、複雑な表情をしていた。「なんつーか、上で暮らしていきたときは気づかなかつたが……俺の〇ポジつてのは……相當なもんなんだな……」

ルルノノが平気そうな顔をしていたから忘れていたが、元々は誰の顔にも影を落としてしまつよつた男だつたのだと、ハクスイは傷つく。

「さ、さすがのあたしも、こんなのは初めて見たよ……」「

「人の心に絶望を芽生えさせてしまうほどの天使か、俺は……」
ハクスイ自身もまた、絶望しきつていいる心ながら、少なくはない衝撃を受けてしまう。ラップをトランクにしまいながら、謝罪する。

「悪いことをしてしまつたな……すまん、中学生の男女……すまん、ルノ……」

「いいいやそんな、そ、そんなに一さんが謝るこじゅ……」

「俺はこのまま空に戻つて、もう一度と地上には来ないことを誓おう……」

「ま、まだ終わつちやいなつてばー、諦めないでにーさんー、ええい、あたしに任せー!」

「いや、しかし……」

ついには少年と少女がそれぞれ地面に頭をこすりつけそうになるほど低頭するに至つて、その事態を重く見たルルノノは、学生たちに声を張り上げた。

「ダメだよ! せっかくの想いをそんな風に捨てちゃつたら、もつたひないよ!」

ルルノノの背に生えた翼が、さらに光度を増してゆく。彼女は強

い言葉の風で、少年少女の冥混沌を吹き飛ばそうと奮闘する。

「自分に負けないで！ ふたりならできるって！ さつきは想いが通じ合つたんだから！ 諦めちゃだめだつて！ 恋は素晴らしいものなんだから、それを嘘にしちゃだめだよ！」

ルルノノは必死に歯を食いしばつて声を張つた。他人のためにどうしてそこまで一生懸命になれるのかわからないほどに、ルルノノは全力だつた。

「ほら頑張つて！ 心に負けないで！ 全力で頑張つて！ 負けないで！ 立ち上がつて！」

それはハクスイが彩光使という職業に対し抱いていたスマートさを粉々に打ち壊すような光景であつたが、なぜだか今のルルノノのほうが、イメージよりも何倍も輝いて見えた。

「頑張つて！」 という一際大きな叫びの後に、少年と少女は立ち上がりついた。その目はもう、ハクスイのようにダークには染まつていなかつた。

「で、でも！」

少女がグッと胸元に当てた手に力を込める。

「わ、わたしそんな風に、ホントに、ダメすぎるけど……でも、でも、頑張るから！」

「ぼ、ぼくも、自分を変えられるように、頑張る！」

冥混沌が霧散し、また新たな機縕光がふたりを包み込む。

「だつて、好きだから！」

「ぼくも、好きなんだ！」

ふたりは顔を真つ赤にしたが、きちんと自分の想いを伝えていた。

「瞬くん、わたしと、付き合つてくださいっ」

先ほどの言葉をもう一度少女が述べると、少年はすぐに頭を下げ

た。

「み、美月ちゃん……」「いかにも……」

今度こそ、美月は涙を目に浮かべて、何度もうなずいていた。天使に祝福されたうら若いカツプルは、こうして結ばれることができたのだ。他人事に興味はないとまで言い放ったハクスイですら「良かった」と思えるほどに純真で、けがれなき世界の神聖な出来事のようだった。

「おお……やつたな、ルノー」

ハクスイが向き直ると、ルルノノは地面にへたりながら息を切らし、それでも誇らしげな顔をしてピースサインを作っていた。

「ぐ、ぐへ……ほら、どう、にーさん……だから安心して失敗して、つて言つたでしょ……」

機操光の力を大量に消費したために、凄まじい疲労感を覚えていいのだろう。ハクスイはそんなルルノノに、純粹な尊敬の眼差しを向ける。

「本当に……すごいな、彩光使の力は」

「ふ、ふふふ……まーね……幸せな人の顔を見ると、嬉しくなるでしょう……」

「いや、それはどうかわからないが……まあ」

安易にはうなずけなかつたが、それでもハクスイは心から幸せそうに微笑むふたり眺めて、考えを改めることにした。

「良いことをした、つて気はしてくるんだろうな」

「ふふつ……そうでしょうそうでしょう……」

辺りにすっかり夜の帳が降りていた時間帯だった。そのとき少年と手を握り合っていた少女が、不吉を感じさせる口調で、つぶやいた。

た。

「あ、カラス……」
つられてしまい、ハクスイが見やると、フエンスの上に一羽のカラスが止まっていた。

「え、なに？ 美月ちゃん」

「あ、ううん……ただ最近よく見るなあって思つて……あ、いいのいいの……行こ、瞬くん」

「う、うん」

少年と少女が去つていってもまだ、ルルノノは神妙な顔をしてカラスを睨んでいる。

「カラス……？ まさか」

「どうしたんだ？ ルノ」

腰が抜けたようにへたりこんだままのルルノノが、何らかの危惧を抱いているその最中だった。突然、つんざくようなけたたましい嗤い声が響いたのだ。

「ケヨーケッケッケッケッケ！」

しわがれた老人の声色が、そのカラスの口元から、放たれていたのである。

「天使どもめ！ いい気になつてゐるんじゃないぞ！ ケヨーケッケッケッケ！」

「や、やつぱり……悪魔！」

敵意のにじんだルルノノの叫びを、ハクスイが聞きとがめた。
「あのカラスが、悪魔……？ 僕が昔見た悪魔は、もつと普通の人の形をしていたが……」

「あたしたち天使とは違つて、悪魔は地上に棲みついているんだよ！ 仮初の姿を取つてさ！ そのほうが人間により影響を及ぼすことができるからね！」

「なんて迷惑な奴らだ」

「より強大な力を持つ悪魔は、黒猫に化けるから、黒猫を見たら逃げなきやだめだからね！」

まだ立ち上がりていない彼女に、悪魔はカーカーと鳴く。
「天使ルルノノめ！ やられ続けた同胞の命の代償を、きょうこそ貴様に払わせてやるぞ！」

「そ、そう簡単にあたしは負けないよ！ 人間さんにちよつかいばつかりかけてもう！」

「そう言われても、これは仕事なのだから仕方あるまい！ ケエツケツケツケ」

「……た、確かに、それはその通りだけど！ でも迷惑をかけるのはつ」

ルルノノの意氣がわずかに鈍った隙に、悪魔は散弾銃のように仕掛けた。

「なによりも傍若無人に我々の仲間を狩り続けたお前のほうが、よ

つぽど迷惑だ！俺の友達だってお前にボコボコされて、じばらく入院し、まだ青あざが取れないのだぞ！」

「うつ……」、「じめんなさい」

「謝るのかー！」

あまりにも思いやりがありすぎるのかなんなのか、良心の呵責に苛まれたルルノノにハクスイが驚く。謝つてしまつたからか、悪魔はますます調子に乗つたようだつた。

「仕事の最中に受けた傷だから労災が下りたものの、それでも一家を養う大黒柱が寝込むことが、家族にどれだけ不安な思いをさせるか、わかつているのか！ それが天使の行う正義か！ 悪魔だつて生きているんだぞ！」

力アーカアーカー、とカラスがわめくと、ルルノノは行き場のない視線を俯かせた。

「うう、それはちょっと、これから手加減して優しく殴るからさ…」

「カアー！（それ見たことか！） カアー！（それ見たことか！） これだから天使というやつはー！」

悪魔はなによりも得意げだ。なんとその姿が徐々に人の形を取つてゆく。手には冥混沌で作られた漆黒の三叉槍を持っていた。

「少しでも悪いと思うのなら、仲間を呼ぶから、ボコられろー！ さあボコられるー！」

ハクスイは無表情で屈み、拳大の石を拾う。その感触を確かめるように何度も放り上げ、受け止めることを繰り返す。そうしてから、おもむろに振りかぶつた。

カラスの真横を、石が凄まじい速さでかすめてゆく。

「うおー！」

「「」ちゅ 「」ちゅ つるせーんだよ、テメエ」

ハクスイだ。彼はしらけた表情で石を拾つては、次々と悪魔に投げつけた。

「悪魔つつーのは、そういう方向からチクチクと責めてくるんだな、参考になつたぜ」

「あ、危ないではないか！ 投石は古代人類文明では、立派な兵器であるぞ！」

慌てた悪魔が抗議するようにその場で羽ばたくと、黒い羽とともに冥混沌が舞い散る。

「それでも天使か！ 相手の言い分を無視して独善を貫くのか！ それ見たことか！ そんなことで人々を救えるとでも思つてているのか か うおう！」

まったく聞く耳を持たなかつた。ハクスイは作業に従事するように石を投げ続ける。

「知らねーよ、帰れバカ、帰れ死ね、地獄に帰れ」

「な、なんだこの男は！ 僕の冥混沌攻撃が通用しないとは……機

！」

恐怖に震える悪魔に、ハクスイはクラスメイトたちを怯えさせる暗黒の視線を突き刺す。

「れっきとした天使だよ。俺はな、悪魔が大嫌いなんだ。ルノに好き勝手言つてんじゃねえよ。羽もぐぞオラ」

「なななな、なんという恐ろしい男！」

ハクスイの怒気を受けて、悪魔は震え上がる。

「うう、ごめんよ、悪魔さん、ごめんよ……」
体育座りをして落ち込むルルノノをかばうよつこ、ハクスイは前に歩み出る。

「つか、黙つて聞いてりや軟弱なことばかり言いやがつてよ。傷つきたくねえんだつたら、下界の人間に手出しするんじやねえよ。一生引きこもつてろ。それができねえんだつたら、戦いに出た時点で死ぬくらい覚悟しやがれ。テメエらネガティブな一族なんだろ。なら死ぬまで戦つて死ね」

「なんて悪い男なんだ！ こんなやつが現れたなど、上司と相談しなければ……エケエツ！」

「お、当たつた」

飛び立つ瞬間に石の直撃を食らつた悪魔は、フェンスから転げ落ち、それでも落不せずに飛び去つてゆく。ハクスイは舌打ちした。
「チツ、逃したか……つて、ひつしている場合じゃねえか、おい、ルノ！」

ハクスイはルルノノに駆け寄つた。頬に影を落とすルルノノは、まるで心細い家出少女のように膝を抱えて、縮こまりながらフェンスに寄りかかっていた。

「お、おい、大丈夫かよ、ルノ……」

先ほどまで笑っていたルルノノが、校舎裏のオブジェと化しているのだ。さすがに心配してしまつ。普段から機縛光がゼロだからこそ、機縛光を失つてしまつた天使がどんな病状に見舞われてしまうのかが、わからない。ハクスイは焦りながらも、ルルノノの顔をのぞき込む。

「…………う…………」

そんなルルノノが、急に口を開いた。

「…………ダメだ……もう、ダメだ……ホントにむり…………歩けない…………歩く気がおきない…………あたしが歩いて、どうなるつていうんだろう

……」こんなあたしが世界にできることなんて、なにひとつないのに、生きているだけ、ゴメンナサイ……なんだら、あたしつてば、なんのために生まれたんだら、天使はどこからきて、どこに行くんだら、……ああ、辛い……」「

その獨白を飲み込むには瞬き10回では足りなかつた。ハクスイは面食らつたまま聞き返す。

「……どう、したんだ？　これが、悪魔の所業なのか……？」

ハクスイはとりあえず衝動的にルルノノの背をさする。

「しつかりしろよ、オイ」

「……だめ、もう死にまくりたい」

「しつかりしろー！」

一体これはどういうことなのか。ルルノノは息も絶え絶えと言つた風体だ。体育座りしている膝の隙間から、スカートの奥の白の下着が見えてしまい、ハクスイは思わず視線を逸らす。

もはや機縫光のかけらも残つていないルルノノは俯いて、首を左右に振る。

「はあ……もう、疲れたよ……人間なんて応援して、なんになるつていうんだろ……」「

「自分の仕事を~~否定~~すんなよー！」

豹変したルルノノは、ハクスイの声も届いていないようだ。気づけば、フェンスの下、茂みに挟まれるようにして小さくなつたルルノノは、すっかりダウナー系の美少女と化していた。

「うへ、お仕事、したくないな……一生、ニートで過ごしたいな……」「

「なんていきなりダメ人間になつてんだよ、くそつ！」

ハクスイは立ち上がりつて機方舟に向かおうとする。だが、その裾がガツシと摑まれた。

「あ？ ああ、ルノ、ちょっと待つてな、今助けを
しかし頑なにハクスイのズボンから手を離そうとはしない。

「しばらく待つてたら……よくなるから……あるいは死ぬかもしれ
ないけど……だから、誰にも、見せなくて、いい……死ぬう……」

「死ぬんだつたらダメだろ！ 下らねえ意地張つてんなよ！」

ハクスイはもう少しで破れそうなズボンを、自分の手で無理矢理
引っ張る。ビリビリという音がしたところで、観念したのか、ルル
ノノがついに手を離した。

「うう、にーさん……破れちゃうつてば……」

「ンなの、どうでもいいだろ。それより早く、通信で助けとか
つて呼べねえのかよ！」

我に帰つたハクスイは、思わず叫んだ。光導輪や機方舟に限らず、
光化製品の全ては機撰光がなければ動かない。ハクスイは無論のこと、
今のルルノノでは扱えないのではないか。

ハクスイは頭を抱えた。ルルノノが元に戻らなければ帰れないとい
うことは、ハクスイひとりでルルノノのピンチをなんとかするし
かないのだ。

「おい、ルノ、俺はどうすりゃいいんだよ！ どうすりゃお前の機
撰光が戻るんだ。応援……すればいいのか？ だけど、俺が応援し
たつて……余計こじれるだけだよな……！」

少女に吹いたラッパの音が、脳裏に蘇る。この状態のルルノノに
吹いたら、なにもかも諦めてしまうかもしれない。気持ちだけが焦
つてしまつ。

暗闇に沈み込む地上を照らす光明が降り注いできたのは、その直後だった。

「お、おお？」

空を見上げると、今まさに、空から新たな機方舟が降りてくるところだった。救援か、あるいは天の助けがやって来たのだ。ハクスイはルルノノの肩を揺する。

「だ、誰かきたぞ、ルノ。助かった、んじゃねえかな……」

まもなく機方舟は地上に着艦した。ハッチが開いて降りてきたのは、小柄な少女だった。

背の低い彩光使だと思ったが、すぐにそれが間違いだと気づかされた。彼女がまとっているのは、一昨年にハクスイたちが卒業したフィノーノ中学校の制服だったのだ。

「ねえねえっ」

降りてきた彼女は動揺を隠さず、まっすぐにルルノノの元へと走つてゆく。

「あ、あー……ねえねえ、ねえねえ？　ねえねえ、ねえねえ」

連呼しながら、しゃがみ込んだ少女はルルノノの頬を掴み、無理矢理に顔を上げさせた。涙の跡の残るくすんだ金色の瞳を覗き込み、それから眉根を寄せた。

「やっぱり……ひとりで地上に行つたって、コメさんに聞いて、駆けつけて良かつた」

少女が手を離すと、ルルノノはマネキンのように力なく俯く。そこで少女は初めてハクスイに気づいたように立ち上がり、丁寧に頭

を下げる。

「あ、初めまして……あの、わたし、二二ノノと言いまして、妹です。その、ねえねえの」

「いや、まあ、なんとなくわかるよ……」

観察するまでもなく、彼女はルルノノによく似ていた。伸ばした金色の髪をひとつ大きな三つ編みにして縛っている。桁外れの機縦光を持つているようには見えなかつたが、それでも十二分な美少女だ。身長は姉とはあまり変わらないようである。

年下の割には落ち着いている二二ノノは、足を内股氣味に揃えて、再び頭を下してきた。

「唐突なお願いで申し訳ございませんが、その、姉のことば、内密にお願いします」

「内密つて……この状態のこと、か？」

「はい、お願いします」

「いや、そりやわざわざ言いつつなことじやねえし、全然構わねえんだけど……」

彼女の真剣な目に見つめられて、ハクスイは彼女に悪影響を及ぼさないように視線を外す。

「しかし、姉妹で彩光使、ってわけじゃないよな。姉が史上最年少の彩光使つーんだから」

「ええ、違います。ついでにこの機方舟は知り合いの彩光使さんからの借り物で、わたしは渡航免状も持つていません。中学生ですし。自動操縦つて便利ですよね」

「犯罪か！」

悪びれず語る二二ノノは、ハクスイの怒声も涼風程度にしか思つていないようだった。

「しかしねえねえを救うという大義の前では、それも靈みます」

「この辺りで正統派な美少女の姉とはずいぶん違うなあ、とハクスイが思つていたところで、ニニノノは肅々と頭を伏せた。

「このたびは、ねえねえがご迷惑をおかけしまして……ねえねえがひとりで地上に降りるだなんて、無茶な話だったんです」

「く……？ だって、一人前の彩光使なんだろ？ ルノは

ハクスイが戸惑つと、ニニノノは「それはそうなんですが」と前置きしてから続ける。

「ねえねえは、たまに、こうなっちゃうんです。ノリに乗つているときは敵なしなんですが、痛いところを突かれたりすると、一気に弱っちゃうんです。打たれ弱くなるときがあるんですけど、ねえねえは優しすぎますから……あ、これは内緒なんですが

「聞いてまつたけどな」

「他言無用でお願いします。だから、落ち込んだときには、その、軽く励ましてあげてください。そつすると、元気を取り戻しますか

「うら

ルルノノの説明書を読み上げるような口調で語るニニノノに、ハクスイは「俺がするのは、気がひけるな……」と少年少女の例を思い出す。

「ね、ほら、ねえねえ、ファイト、ねえねえ、がんばれー」

「うら……」

姉の手を両手で握り、ニニノノはつたない応援を繰り返す。彼女の口調はハクスイに向けられたものより、ずっと温かみを帯びていた。ハクスイは成り行きを見守ることにした。

「ちょっと疲れただけだよね。ほら、誰も見ていないから、今は丈夫だよ。でも少し休んだら、また、立ち上がり？ ね？」

「……あたしは、頑張れるかな……応援の女神さまが、まだ、微笑んでいてくれるかな……」

驚くべきことに、ルルノノの瞳に輝きが戻りつつあった。

「応援の女神さまは、ねえねえだよ」

二二ノノは聖母のような微笑みで、そんなルルノノの頭を撫でた。

「ねえねえの望むままに、世界は動くんだよ」

美少女姉妹の背景に、真っ白な百合の花が咲き誇つて見えたのは、錯覚だろうか。

「べ、別にそんな、独裁者にはなりたくないけど……」

立ち直りかけたルルノノの顔が引きつる。

「うん、ちょっとと言い過ぎたよ。でも頑張って、ねえねえ。世の中には冥混沌に囚われて右も左も見えなくなっちゃっている人間がたくさんいるんだよ。ねえねえがへこたれていたら、その人たちを救つてあげられる天使は、ひとりもいなくなっちゃうんだよ」

「そ、うかな……」

信じきれない顔をしたルルノノの手を取り、二二ノノは強く頷きながら断言する。

「そうだよ！」

「そつか……」

「うん、そう！」

ついには根負けしたかのように、ルルノノも笑みをこぼす。

「そう、だね」

「うんうん」

そして、ルルノノは立ち上がった。

「そつか！」

じうしてルルノノは蘇った。完全復活だ。彼女の背後にキラキラ

キラーンと紅白の光が輪を描いて見えたのは、機縛光の影響によるものだろ？。

「いやあ、こんなところで機縛光が切れちゃうとは予想外！　でももう大丈夫！　エンジエル平気！」

二二ノノはそんな姉を眩しそうに眺めながら、手を叩く。

「良かった、ねえねえ、元通りだね」

「えー……」

良かつたのは間違いないのだが、ハクスイはなぜか釈然としなかつた。世界にひとり取り残されたような気になり、本気で心配していた自分が恥ずかしかつた。

「負けるな！　自分に勝てー！」

「ねえねえ、頑張れー、可愛いー」

ルルノノと二二ノノは手を握り合いながら、ルルノノ号へと乗り込んでゆく。ちなみにこれはあとで聞いた話なのだが、彩光使の機方舟にも、バツテリーはついているようだ。それを使って帰れば良かつたのだという。

（）

姉妹に手を引かれて機方舟に乗り込んだハクスイは、疲労感を覚えて座席に深く座り込む。

「濃い、一日だつたな……」

ルルノノはニニノノの乗つてきた借り物の機方舟を牽引して、天使たちは空に帰つてゆく。

「初めて地上に降りた感想は、どうかな、にーさん」

ハクスイの右隣に座つていたルルノノは、足を組み直しながら、落ち込んだことも忘れたような笑顔ではにかんでいた。左に座つていたニニノノは、窓の外の文明の光に彩られた地上を見下ろしながら、ぼそりと水を差す。

「ねえねえが最後までしつかりしてたら、もっと良い思い出に残つたんでしょうけれどね」

「あははー、またまたー」

「そうだな……」

あながち冗談でもなかつたが、ルルノノにバシバシと肩を叩かれながら、ハクスイは顎に手を当ててきょうを振り返る。クラス全員抜きから始まり、シユレエル先生の呼び出し、彩光使との出会い、それから初めての地上だ。さらに初めての機方舟、少年と少女の応援、悪魔との遭遇、落ち込んだルルノノと、ニニノノの犯罪行為。ハクスイは腕組みをして、総括する。

「大変だつたけど、まあ、どれも学生じゃ滅多に体験できるもんじやねえからな……」

なによりも、彩光使の夢へと、ほんの少しだけ近づいたような気がしたのだ。それは機鎗光がゼロのまま固定で、一切の手応えのない自分の人生において、限りなく小さな、そして非常に大きな一步であるように思えた。運転を自動操縦に任せて、ニニノノとふたりで窓の外の景色をのぞき込んでいるルルノノに、ハクスイはわずかに頭を下げた。

「ありがとな、ルノ」

「えつ、なにがなにが?」

「いや、じつちの話だよ。明日からもまた、よろしくな、彩光使さん」

そうぶつきらめきにつぶやくと、ルルノノは満面の笑みを浮かべて、うなずいた。

「うん!」

人間が言う“天使のような笑顔”とは、このことかと、ハクスイは思った。

ルルノノ、ニーノノとともに天ツ雲に帰った頃には、もう日も暮れていた。

それぞれ機方舟を置いてくるというらしいので、ハクスイだけが先に学校に降ろされる。とりあえずシユレエルに挨拶をしてから、ハクスイはひとりがらんとした校内を歩く。

教室に寄つて鞄を取つてくると、下駄箱を出てすぐのところで、ルルノノが校門に寄りかかりながら待ついてくれていた。

「にーさん、あの……もしよかつたら、い、一緒に帰らないかな？」

夕日に照らされてか、ルルノノの頬はわずかに朱が差しているようを見えた。

「あ、ああ？　いいぞ」

ふたりは口数少なく、帰り道を辿る。ルルノノの家がどこにあるのかは知らなかつたが、とりあえずは同じ方向に向かうようだ。

「……」

日の落ちた天ツ雲の並木道を、自動点灯の機選光灯が照らしている。

大小の雲が連なつた天ツ雲には、時々穴が開いてある場所もあり、そういうつたところは細い橋で繋がれている。飛べないハクスイにとっては、落ちた瞬間に下界へ真っ逆さまのデンジャラスゾーンだつたりもある。

肩を並べて歩いていると、珍しく静かだったルルノノが、伏し目がちに尋ねてきた。

「きょ、きょうは楽しかった、かな？　にーさん」

「ああ、まあ……楽しかったってより、なんだろうな、色々とびつ

くつしたよ」

「そ、そつか、まあそうだよね。でも、いろんなことを学びながら、天使は大きくなつていくんだよね……！」

いくらほほ初対面とはいえ、さすがに鈍いハクスイでも気づく。ハクスイは立ち止まって、ルルノノに振り返る。

「なにか俺に言いたいことがあるんじやないか？」

「えつ！」

ルルノノは胸を押さえながら後退りする。田をぎゅっと瞑つて首を振る。

「す、鋭いよーさん……さすが、さすがだよ……さすがのエンジエルだよ……」

「……まあ、俺だつて馬鹿じやないからな」

天ツ雲ではいたるところに花が咲いている。天使の放つ機鎗光が勝手に養分となり、水も土もないのに、四季問わず様々な花を育ててしまつらしい。色とりどりに並んだチューリップを眺めながらハクスイが待つていると、ルルノノは突如叫び出す。

「う、うつう、勇氣！　勇氣ー！　お願いやつきー！」

「え？　な、なんだ？」

「心の中の勇氣さんに頼んだのー　力を貸して、つて！」

「そ、そつか」

到底、論理的ではない答えが返つてきたが、ハクスイは納得する。とにかく、なにかをしようとしているのだろう。

「あ、あのせ、悩みと言つたらさ、人の悩み事を聞いて解決するのも、機鎗光の良い増強に繋がるんだよ。外界で人間を助けてくる、みたいなものでさ……」

「へえー、お前が言うならそうなんだろうな」

「だ、だからさ……だから、だからなんだけどせつ」

ルルノノは焦つたような口調で、ハクスイの前に拳を胸元で握りながら迫つてくる。

「い、いつこ、やつてみないかな、にーさん！」

「突然だな……まあ、それはいいんだが、誰の相談を受ければいいんだ？ 誰か、知り合いで悩んでいるやつでもいるのか？」

「あ……あたし、とか」

「……ん？」

（）

（）にはハクスイの部屋である。茶の置かれたテーブルを挟んで、ハクスイとルルノノが向かい合つていた。

「……それで、俺に？」

「……う、うん」

（）ちなくうなずくルルノノは、なにやら思いつめたような表情で正座をしていた。

（そら、ほとんど初対面の俺に相談するくらいなんだから、相当切羽詰まつてんだろうけどさ）

ハクスイの部屋は清潔に整えられているというよりも、単純に物が少なかつた。趣味も興味もない男の、つまらない部屋だと開き直り気味に自覚している。

それはそうと、ハクスイは腕組みをしながら、慎重に尋ねる。

「あのさ、他にもつと、人材はいなかつたのか？」

「い、いないよ」

「即答がよ」

ンなわけねえだろ、と思つ。なにを貰いかぶられていのかもわからない。

「いや、だつてさ、俺だぞ？ それよりもっと、彩光使の同僚とか、あるいは先生とか、あの妹さんとか、誰だつて俺よりはマシじゃねえか？」

「だつてこんなこと……」ヒーさん以外には、その、恥ずかしくて、話せないから……」

縮こまつて首を振りながら、ルルノノは今までに見たことがないほど、赤面していた。耳を通り越して、うなじの辺りまで真っ赤になつてゐる。白い肌だけに、その紅色が大きく目立つていた。

「恥ずかしい、つて……緊張しちまうじやねえか、オイ」「ハクスイもまた、照れ隠しにそんなことをつぶやいてしまう。なにを話されるのだろうかと待ち構えていると、ルルノノはようやく口を開いた。

「あ、あのね……お話してみてから、ヒーさんだつて、決めて……ほら、にーさんつて、物怖じしないでしょ。初めて地上に行つたつて、平然としてたし……多分、笑わないで聞いてくれるつて、そう思つから……その、無茶な、お願ひかも、しれないんだけど……」「俺に、お願ひ、か」

少なくとも、下界に降りたときに平氣そうだつたといふのは、彼女にはそう見えただけだ。自分はいっぱいいって、慌てる暇すらなかつたのだ。

本当は今だつて、ルルノノの『お願ひ』とやらが自分の手に余るのであることはわかつてゐるのだ。だがそれでも、職務とは言え、こんな自分に一生懸命尽くしてくれてゐるルルノノの信頼を裏切りたくはないと思う。

ルルノノは、こんな自分の目を見て話してくれる初めての天使だ

から。

スカートをぎゅっと握つて、恥ずかしさに耐えているような顔をしているルルノノに、ハクスイは「構わねえよ」とうなづいた。
「……ルノには、世話になりっぱなしだし、これからもそうだらうからな。俺にできることがあるなら、なんなりと言つてくれよ」
その紛れもない本心からの言葉に、俯いていたルルノノは嬉しそうに白い歯を見せた。

桃色に染まつた頬を上げて、熱のこもつた潤んだ視線でハクスイを見つめてくる。

「そう言つてくれると、すゞしい、嬉しい、あのぞ」
ルルノノは手を合わせて、頭を下げた。

「お願ひ、にーさん！ あたしを、どうか、ドMにしてくださいっ！」

「…………あ？」

学校での衝撃、再び。

第一話・9「はじめての下界、はじめての出来事」

じつと汗ばんでしまったような長く辛い沈黙の後だ。まるでせきを切ったような勢いで、ルルノノが手をわたわたり動かしながらまくし立てた。

「べ、別に、そういう変な意味じゃないで！ ほら、あたしつつやっぱり落ち込んだじゃうわけで、今のところはたまたま上手くいって、彩光使のみんなの前で機運光がなくなつたことはないけど、でもいつも悪魔に責められてまた暗くなつちゃうかわからないから、その前にどうにかして弱点を克服したいと思つているわけで、でも悪口に對して強くなつたり心を鍛えるのつてどうすればいいのかなって悩んでたときに、下界でSとかMとかそういう話を聞いてああこれだつてガツツポーズして、だつてほらD Mにもしなれたらどんな嫌なことを言われても気持ちいいつて感じるようになるらしいから、それってほらすつごいエンジェルハッピーで一石二鳥でしょ！ ね！ ね！ ね！ ね！」

「あ、ああ、と、とりあえず座れ、な？」

テーブルを乗り越えてこちらの顔をのぞき込んでいたルルノノに、ハクスイは落ち着くよう諭す。身を引いてくれたルルノノの表情を伺いながら、ハクスイは頭をかく。

「ンでも、ドMつて、お前な……」

「あ、もしかして、元へさんつてば、それがどんなものか知らなかつたり、する……？」

「マゾヒストの略だろ？ 知つていろいろけど……それって、アレだろ、痛いことされると喜んだり、人格を否定されると興奮するっていう……変態、だろ？」

「ち、違うよおつー！」

ルルノノは顔を真っ赤にしながら、強くテーブルを叩いた。湯のみがふたつ跳ねる。

「下界ではそうかもしないけど、あたしにとつては悪魔の攻撃に対する完璧な防御法だよ！ だつて傷つくこともなくて、その上樂しいんだから、ほら、無敵なんだよ！」

「いや、まあ、理屈じゃそうのかもしんねーけどさ……」

「だつて、にーさんも、見た、でしおつ……？」

ルルノノはそこで急に語意を弱めて、膝の上に手を戻した。

「あたしが、悪魔の囁きをまともに受けて……それで、行動不能になつちやつた場面を……あんなの、あのままじやいけないと言わざるをえないよ……」

「まあ、そうだな……」

きょうはハクスイがいたからいいものを、あれがたつたひとりの状況だつたら、今頃ルルノノは大変な目に合つていただろう。最悪、殺されてしまうことすらあり得るのだ。シュレエルではないが、そんなことが起こつたら天ツ雲フィーノーの損失に違いない。

ルルノノのことを考えれば それが彼女のためになるのなら、諸手を上げて協力するべきだ。

(だから、つて……ドM？ そんな解決策か……？ まあ他に心を強くする手段でどんなのがあるかと聞かれたら、すぐ「には出てこねえけどれ……」)

「だ、だから、にーさん、お願いつ、あたしを、立派なドMに……」

「つか、一番の疑問はだな……」

ハクスイは茶をすすつて、仏頂面になる。

「……なんでも、お前、俺ならルノを立派なドムにできるだりつつて、思いこんでんだよ」

「えつ、だつて」

ルルノノにしてみれば、それは意外でもなんでもないことのようだつた。

「にーさんだよ！ できるに決まっているつて！ むしろにーさんにできなきや、天ツ雲で誰ひとりとしてできな」よ…」

「なんでだー？」

「一田見たときに、ピンとしたんだもん！ あ、この人は心の底から、どうだ、つて！ ほら、田を、田を見ればわかるよ！ 誰だつてわからざるをえないよ！」

「お前、そんな風に俺を見ていたのかよ……」
さすがに心外だ。できるわけがない、と思つ。

「いや、つーかな、ルノ……」

「……」

ルルノノはじ一つとこからを見つめている。きらきらとした瞳がハクスイを捉えて放さない。どこからか「おねがいっ、にーさんつ……」などと、小さなささやきのような声が漏れてきた。エフェクトを発生させるような機縫光の効果だろうが、それはさすがに反則だと思つた。

「あ、あのな、お前……」

大体、ドムとドムの関係というのは、そういうことではないか。
健全な男子高校生が美少女のそんなお願いを断るのが、どれほど難しいことか。ハクスイは健全ではなかつたが、れつきとした男子高校生なのだ。

「ど、どうしても……嫌……？」

ルルノノの瞳にじわっと涙が浮かんでくる。ふたりの周囲の空間が滲み、まるでそこは海の底のように光が屈折して、綺麗な乱反射を描いた。

ハクスイは思わず顔に手を当てた。振り絞るようにしてつぶやく。

「……一日、時間をくれ

「だ、だめだよ！」

「なんでだ！？」

「だ、だつてそんなの、あたし、きょう寝れなくなっちゃうもん！」

「俺だつて寝れねーよ！」

真っ赤な顔を突き合させて怒鳴る。それからハクスイは大きなため息をついた。

「いや、つーか、まあ……くそつ……」

言いたいことは空に浮かぶ雲の数ほどにあったが、ルルノノが固く信じている以上、ハクスイにはどうしようもなかつた。ハクスイは諦めたように首を振る。

「……他にいねえつーなら、まあ、やるよ、やってやるよ。ルノの助けになるなら、な！」

もう半ばヤケだつた。

「に、にーをあ〜ん……」

はぐれた飼い主を見つけた子犬のような潤んだ瞳でこちらを見つめてくるルルノノに、ハクスイは小さく溜め息をつく。もつとい。決めたならもう、あとは徹底的にやるしかない。

「まずは試してみつか、ルノ。とりあえず、俺なりのやり方で虐めりやいいんだる……」

「わあい、Hンジエル嬉しい！」

虚められると聞いて満面の笑みで手を叩いているこの時点で、ルノノはもう一人前のドMなのではないかとハクスイは思ったが、それはともかくとして続ける。

「それをどう受け止めるかは、お前次第だよ。嫌だったら、辞めりやいいしな。気に入つたんだったら、俺に続けさせりやいい。選ぶのはルノ、お前つてことにするからな」

「うん、それでいいよー。全然いいよー。ありがとうにーさん！」
「あとは……そうだな、よくわかんねえから、上手にだと、そういうのは期待すんなよ」

「あ、で、でも！　い、一応にーさんは一生悪口禁止だから、そういう心に刺さるのはナシでね！　あたし泣いちゃうんだからー。」「なんだと」

「い、痛いのとかは、ちょっとは平氣だけど、でもなるべく勘弁してほしいな……も、もちろん、これは、あの、言うまでもないかもしないけど、え、え、えっちなのは、絶対にダメなんだから！
あたしまだ清楚純真な乙女なんだからね！　あ、あとは、まだまだ他にも」

「……注文の多いドMな感じ……」

「お・き・て」

耳に小鳥のさえずりのような声が注がれて、ハクスイはぐすぐつたそうに身じろぎをした。

機方舟に乗つていいような感覚は、揺さぶられてるからだとわかつた。さらに腰の辺りに、ちょうど人ひとり分ぐらいだろうか、妙な重量感がある。ハクスイは湯船から出るよつに、ゆっくりと目覚める。部屋には朝日が差し込んでいた。涙目をこすつてから腕を伸ばす。

「…………ミズカ、か……なんだ、きょうは、やけに早いな……」
と、目を開けて、ハクスイは思考回路を停止する。

「おはよっ、えへへ、にーさんっ」

鼻と鼻が接触してしまいそうなほどの目の前に、ルルノノのひまわりのような笑顔があつた。

「…………」

どうやらルルノノはハクスイの上に女の子座りでまたがつているようだ。スカートから覗く素足の白さが、明光に反射してまぶしかつた。念のために確認をすると、確かにここは物の少ないハクスイの部屋であった。もちろん、昨晩ルルノノと別れて帰つてからの記憶もしつかりと残つていた。

「…………」

「え、えへ、起こしに、来たよつ」

照れたように微笑むルルノノは、制服姿だった。そうしてなぜか

頭の上で手を丸めた猫のようなポーズを取つて、体をくねらせていた。

なにも言わないハクスイにじっと見つめられて、ルルノノは徐々にほっぺたを赤く染めてゆく。自分がなにかおかしいことをしている自覚があるのかもしれない。金色の髪がふわりと広がり、逆光に溶けて、琥珀のようにきらめいていた。

「あ、あのね……ほ、ほら、にーさん、し、幸せ……かな？」

まるで言い訳するように、ルルノノは上目遣いで問いかけてくる。「い、こうこの、良いつて、その、トモダチに聞いてね……聞いたからには、ほら、やうざるをえないから。ね、ど、どうかな、ちよ、ちよつとは機縫光レベル、上昇したような感触があるかなっ？」ハクスイは目を閉じて、かぶりを振りながら、うめぐ。

「……なんてことだ……」

「な、なにそその『反応』」

態度一変、顔を真っ赤にしたルルノノがハクスイの首根っこを掴む。

「無断侵入者がいる……彩光使を呼ばなければ……」

「彩光使ならここにこりつて！ てこうか冷静すぎるよーーさん！ 他になにかないのー！」

「重い」

「お、重くないよー 重いわけがないと言わざるをえないよー むしろ最近はエンジェル軽くなつたほうなんだからねー」

ルルノノはスカートの裾を翻しながら、ハクスイの上で黙々つ子のように手を振り回す。

「だ、大体おかしいよー 女の子が寝起きにベッドの上にいたら、もつと桃色の反応をするべきだと言わざるをえないよー それが真

つ当然天使のリアクションだつて聞いたんだから!」「俺にダメ出しされてもな……」

仰向けのまま、ハクスイはバンザイをした。

それからふと思いついて、ハクスイは前髪をかきあげながらルルノノに尋ねる。

「なあ、ルノ。今のお前は、彩光使としてのルノか？ それともただの女子か？」

「え？ あ、ど、どうかな。ついつい来ちゃったのは、彩光使としての使命感からだけど、まだ学校も始まってないし……」「なるほど」

ハクスイは身を起こす。ルルノノとの顔の距離は、息がかかるほどに近い。ハクスイはフローリングの床を指さしながらルルノノに言いつける。

「なら、どけ」

「うつ……」

ハクスイの瞳に冷たい光が宿ったのを見て、顔を赤らめながらもルルノノは素直にそれに従つた。その姿を見て、ハクスイは右手を彼女に差し出す。

「ルノ、お手」

「なんで！？」

聞き返しながらも、ルルノノは小さな手のひらを乗せてきた。右手で髪をいじり回しながら、「うーうー」とうなつてている。相当恥ずかしいのだろう。

（いや、それは俺もだけどな……）

S M契約を結んだのが、昨日のことだ。

それからハクスイとルルノノは、いくつかの取り決めを定めていた。

ルルノノはハクスイが彩光使になれるよう、全面的に協力する。

同時に、ふたりきりのときにはハクスイもまた、ルルノノがドMになれるよう尽力する、ということだ。

『一、これは、にーさんが彩光使になるために、そ、そーー、自信をつけさせるためつていう目的もあるんだからね！ そこを勘違いしちゃだめだからね！』

と、ルルノノは言っていた。完全に建前である。

「ほれ、おわり」

「う、ううううう……」

今度は反対側の手を差し伸べてくるルルノノに、ハクスイは神妙な顔で首を傾げる。ルルノノの所作は愛らしいものの、しつくらない。

「なんかちげえな、これ……」

「え、SとかMとか、あんまり関係ないよねつ……」

ルルノノがハクスイに犬扱いされることに対しても、あまり抵抗がなさそうであった。互いのこそばゆいシチュエーションにこそ、恥ずかしがっているきらいもある。

「そつか……基本的には、ルノが嫌なことをしないといけないんだな」

「な、なんだろ……？ す、スカートめぐり、とか……？」

「高校生にもなってやることかよ」

こわごわとこちらを見つめながらおしりを押さえるルルノノを冷ややかに眺めるハクスイ。その視線が壁にかかつた時計を撫でる。もうそろそろ時間に余裕がなくなつてくる頃だ。

「……とりあえず、次は学校から帰つてきてからだな。色々試してみるしかねえだろ。俺もルルノノも納得できるような、そんな感じのをさ」

「う、うん……」

ハクスイが立ち上がりつて伸びをすると、その裾をルルノノが小さく引っ張つてくる。

「あ、あの、にーさん……なんか、ごめんな、こんな、面倒かけちやつて……」

「ああ？　お前がそれを言うのかよ」

「えっ？」

ハクスイは頭をかきながら、ルルノノから視線を外す。

「お前だつて、すまねえな。こんな〇ポジの男に付き合わせちまつてよ。そっちにはなんにもメリットがねえのにや。鬱陶しいだろ」

「そつ、そんなことないよ！」

両手を握り固めて真剣に否定してくるルルノノの頭に、ハクスイはポン、と手を置いた。

「サンキューな。だから、そういうことはもう、言いつこなしにしようぜ。俺は“やつてみる”って決めたんだからさ」

「あつ」

ルルノノは慌てて頭を押さええる。それからしばらくハクスイを見つめていたかと思うと、顔を綻ばせた。田を線のように細めて、彼女は笑う。

「うんつ、ありがと、にーさん…」

（）

ルルノノを部屋の外に出して着替えを済ませたところで、ハクスイは朝に弱いミズカを起こす。あの騒ぎでも田を覚まさなかつたのだから、大物だ。

玄関に待たせておいたルルノノとともに家から出ると、隣の部屋からちよづビヴィエが出てきたのが見えた。思わずハクスイは間の悪さを呪う。

(……いや、別に、悪いことはなんにもしてねえんだけどさ……)
ハクスイたちが住んでいるのは、中央庁から与えられた共同住宅だ。自分の部屋のノブに鍵を差し込むとするヴィエが振り返つてきて、朝から不幸せそうな顔で挨拶をしてくる。

「あら、ハクスイ……おはようなの」

「あ、ああ……」

ひきつった顔で返事をするハクスイの後ろから、美少女の笑顔でルルノノが現れた。ヴィエはぽろっと鍵を手のひらからこぼす。

「……あら、まあ」

ヴィエの切れ長の目が細められた。ハクスイはなぜだか不穏な気配を感じてしまう。錯覚なのだろうが、まるでカラスに睨まれているような……

「いや……これはな、ヴィエ……」

普段なら勘違いも全て放つてしまえばいいのだが、今度の相手は彩光使のルルノノだ。自分と噂されたのでは、どんな不名誉な風評が立つてしまうかわからない。ハクスイが誤解を解く言葉を考えていたところで、ヴィエが先につぶやいた。

「……ハクスイの担当の彩光使さんって、るーちゃんだつたんだ」「あ、ヴィエちゃん、やつぼー！ なんだ、隣つてヴィエちゃんの家だつたんだねー」

「ああ？」

ハクスイを通り越して、ヴィエとルルノノが挨拶を交わす。ハクスイはヴィエの落とした鍵を拾い、彼女に手渡す。

「えーっと……お前ら、知り合いなのか？」

「親友だよ！ ね！ えへへ！」

ルルノノが微笑みかけると、ヴィエも小さくうなずいた。

「う、うん……そう、お友達……最近なかなか会えなかつたけれど、仲良しなのよ」

「でも俺、お前たちが並んで喋つているとこ、見たことねえぞ？」

ヴィエは顔を伏せて自らの身体を抱く。

「だつて、るーちゃんとわたしが学校で話しているところが、他の誰かに見られたら、るーちゃんの株が下がつちゃうから……だから、ずっと、学校では我慢してたのに……」

「そんなこと思つてたんだヴィエちゃん！ 確かに避けられている

よつな気がしたけど！

「無駄すぎるだろ、その努力……」

外に出ると、まるでルルノノの笑顔のように突き抜けた蒼い空が広がっていた。太陽光線が眩しいほどに降り注いでいる。学校へと向かいながら、ヴィエとルルノノは互いの近況などを語り合つていた。

「でも、せっかくのるーちゃんの頑張りを貽^{ゆき}するのは申し訳ないけれど」

ヴィエは顔を曇らせる。

「ハクスイの機縫光を上昇させるのなんて、女神さまでも不可能だと思つ」

「え、ど、どうしてやー。無理じゃないよ、きっとできるよー。」

「本當だよ。こきなりなに言つてくるんだよ、この白眼女は……」

「だつて、ないものはないのよ」

「その胸のようにな」

「……」

「……いてえよ、無言で蹴るなよ。先に言つたのはヴィエだぞ！」

「齶死してしまえばいいの」

「俺に言つとシャレにならねえな、それ……ん？」

そこでハクスイたちはルルノノが立ち止まっていることに気づく。振り返ると、ルルノノは肩をふるふると震わせて、俯いていた。長い前髪の隙間から田は見えない。

「どうした、ルノ……」

問いかけたその瞬間、金色の田を光らせながらルルノノが腕を交

差しながら顔を挙げた。

「ダメだよ！ダメ！ ハンジルタブー！」

ルルノノは指を鳴らし、警告つけ、と言つたふうにひきを指してくる。

「あのね、そんなんじゃダメだよ！ 悪口言つたびに、機縕光が減つちゃうよ！」

突然のいちやもんに、ハクスイとガイハはどうやらもく惑つ。

「悪口、つていうか」

「いつもの……？ なにかしら、挨拶みたいなもの？」

機縕光を燃やし、メラメラとう炎じみた光を放ちながら、ルルノノがピシャリと言い放つ。

「でもダメ！ 退廃的な発言はよくないんだよ！ 機縕光が逃げちゃうんだからね！ ダイエットしようとしている子が、夜にラーメンを食べるみたいなものだよ！」

「身近な例えだな、ダメだぞルノ

「うん、精一杯我慢しているんだからね、偉いでしょ！ つて違うよ！ これから、にーさんは悪口禁止！ 一生禁止！ 死ぬまで禁止！ むしろ事ある」と、人を全力で褒めよつ…」

「なんと…」

「無茶なの。ハクスイなんかが、絶対無理なの」

ヴィエニソガ、とてもできないとばかりに手のひらを扇がせる。しかしその一方で、ハクスイは手を顎に当てて考え込んでいた。

「…………しかし、彩光使の言つことだもんな…………間違つてはいねえんだろうし……よし、わかつた。すぐにできるかどうかはわからないが、なんとか、心がける」

「その意氣その意氣！ あたしもバリバリ応援するから…」

「……へえ

そのとき、ヴィエの目が光つたような気がした。ハクスイは背筋に悪寒を感じてしまう。

「大変ね、ハクスイ。でも、彩光使になるために、頑張つて」「お、おう」

つか、お前も目指しているんじゃなかつたのかよ、とハクスイは言いたげだ。

「そんなブラックホールみたいな目をした限りなく悪魔に近いハクスイが、どうにかしてもがく姿を、見守つていてあげるから。アリの行列を観察するような気持ちで、ね」

ヴィエのなにかのスイッチが入つてしまつたようだ。

「テメエな……」

拳を握り固めるハクスイに、ルルノノの視線が矢のような鋭さで刺さる。

「悪口禁止だよ、にーさん」

「……ああ、わかってる」

「あら、わたしは協力してあげているの。ハクスイが穢やかな心を持つていられるように」

そんなうわべだけの発言を、しかしルルノノは有り余る善良さで前向きに捉えてしまった。

「神様の試練みたいだね！ 良かつたね、にーさん！ これに耐え抜けば、強靭な心が手に入ると言わざるをえないよ！ ほら、ヴィエちゃんに感謝の念！」

「……ありがとよ、優しいな、ヴィエは」

ヴィエは手の甲を自分の口元に寄せて、淑女のよつな高潔な仕草でうつすら微笑む。

「どういたしまして、ハクスイ。でもあなたに褒められると、全身

に怖気が走りまわって、とてもじゃないけれど安らぎとは無縁な気持ちになる。気持ち悪くて、今すぐ病院に駆け込みたくなるんだけど、そのことについて自分でどう思っているのかお聞かせ願いたいの」

「あんま調子に乗んなよヴィエ　つてうえええい！」

ハクスイの眼前を輝く槍が貫いていた。

「リラックス、リラックス、にーさん。何事にも動じず、寛容な心を持つんだよ」

「お前の光輝武装を突きつけられて、落ち着いていられるか！」
ルルノノが両手で構えていたのは、電火を発する『光の戦斧』^{ハルバード}だ。
悪魔に対抗するための装備だが、天使にとつても無害といつわけではない。地面が抉れていたりする。

「そうなのよ、ハクスイ。そんなにカッカしないで

「なんかお前は今まで見たこともないくらい楽しそうだな……」

罵られて脱力していたハクスイも、普段はクールなヴィエが童女のように目を細めて笑う姿を見て、「まあいいか……」と若干溜飲を下げる。そんなヴィエの白い肌から、光がこぼれているような気がする。というよりも、事実、機縛光が薄く放出されていた。

「あつ、ホントだ！」

そこで光輝武装をしまったルルノノがポケットから取り出した機械を見て、歎声を上げた。

「あ、なんだ？」

「ヴィエちゃんの機縛光、上がっているよ！　ほらこれ、昨日の夜に借りてきた、新品の携帯型機縛光測定マシーンなんだけどね」

「えっ」

ヴィエもまた、その電卓のような装置を覗き込む。数値を見ると、

機縕光の反応は確かに上昇傾向を示していた。もともと32だったヴィエの値が34ポジまで伸びて、さらに上がり続けている。

「ホント……」

ヴィエが胸を抱いて、ハクスイを見つめる。その目がわずかに潤んでいた。

「良かった、わたし……良かった、これからも、ハクスイを罵倒し続ける……っ」

「頑張って、ヴィエちゃん！」

「……」

手を組む女性陣に、ハクスイが密かにため息をついていると、その肩をルルノノに叩かれた。

「そんな顔をしなくても、大丈夫大丈夫！ にーさんも機縕光が溢れたら、どんな悪口を言われても気にならないからさー。」

「……そう、なのかね」

確かに罵詈雑言を武器にする悪魔と戦う以上、彩光使には寛容な心が求められるかも知れない。しかしハクスイが思い出していったのは、ネガティブ化したルルノノである。フェンスの陰にうすくまつて体育座りを続けていたルルノノの暗い顔が、彼の脳裏をよぎっていたのだった。

学校が始まり、午前の機選光学の授業中、どこにでもある一クラスの授業風景……のはずだった。

しかしハクスイは、彩光使ルルノノの一撃決めたらやり遂げなくては気が済まないという、義理堅さを知らなかつたのだ。

「えーそれじゃ、次を答えてもらおうか……えーと、ハクスイくん……に頼もうかと思うが」「はい」

一番後ろの窓側の席に座るハクスイが返事をすると同時に、横手から「にーさん頑張ってっ」の声援が飛ぶ。もう明らかにおかしいのだが、ルルノノが自分のクラスから椅子だけ持ってきて、ハクスイと並んで座っているのである。まるでカップルシートのようだ。

さすがに、言及しないわけにはいかないのだろう、受け持ちは機選光学のシュレエルが顔をひきつらせながら尋ねる。

「その前に……どうして、ここにいるんだ、ルルノノくん……」

「えつ！」

机に頬杖をつき、ロマンチックな夜景を見つめるような潤んだ瞳でハクスイの横顔を見守っていたルルノノが、信じられないといった調子で振り返った。

「あたしは一彩光使として任務の最中なんです！　にーさんを任意観察し、機選光の育成に励んでいます！　シュレエル先生にも

邪魔されたら困ると言わざるをえません！」

どんづ、とハクスイの机を叩くと、シユレエルは冷や汗を流した。

「そ、そ、うか……な、なるほど……よ、わかつた……いや、彩光使の言つことなら、聞くとも……しかし、ハクスイは、それでいいのか……そ、そ、な、横でずつと、ずつとか？」

「朝からずつとなの」

代わりに答えたのは、不満そうにシャープペンを脣の下に押し当てていたヴィエ工だった。

「……どちらかと言えば、さすがに、周りのわたしたちのほうが気になりますの」

確かに、クラスに彩光使が居座っているというフレッシャーは凄まじいものがあった。クラスが未だかつてないほどに静まり返っているのは、そういう理由なのだ。

「だ、だ、だ、だ、だぞ、ルルノノくん」

「全力で申し訳ないと思つていてるね！　エンジニア」勘弁…」「思つてはいるのか…」

シユレエルは職務を放棄したくなる。それで話は終わつたとばかりに、ルルノノはハクスイに向き直り、はちみつが注がれているような甘い声色ではやし立てる。

「ほら、にーさん頑張つて！　みんなに良いところを見せるチャンスだよ！　正解して、みんなに頭良いって思われる、それが自信にも繋がるからね！　ふふつ、全力で頑張つて！」

「毎回こんなことを横で言われ続けているんだろ？　辛くないのか？」

？

沈黙を保つたまま、ハクスイは教科書を持って静かに立ち上がる。

「……『機撰光は、人々の希望によって空に立ち上り、天使の力となる』です」

ハクスイが再び無言で着席すると、なにもおかしなことはしないはずなのに、教室には妙な雰囲気が立ち込める。そんな中、授業を進めようとシュレエルがうなずいた。

「……正解だ」

その直後、拍手が鳴り響いた。ルルノノのひとりスタンディングオベーションだ。

「す、すごいやにーさん！ そんなに難しい問題！ さすがだよにーさん、布拉ボー、すごいや、カッコイイ！ エンジニア素敵だよにーさん！」

「……ずっとこんな調子なのか？」

「そうですの」

シュレエルに答えるヴィトは、やはり不機嫌そうだった。

「本当に辛くないのかハクスイ。なにか、弱みを握られていたりしないのか？」

「なにを心配しているんすか」

ハクスイは透き通るような穏やかな顔で、まぶたを閉じる。

「……俺は頼んでいる立場ですから、感謝しこそれ、なにひとつ嫌な思いはしていません」

「は、ハクスイ！」

シュレエルが目を剥いた。

「どうしたんだお前、たった一日での変わり具合は！ なにがあつたんだハクスイ！」

ルルノノにじっと見られているハクスイは、まるで喉元に剣を突きつけられているような気持ちだった。あながち比喩でもない。

「ただ、俺は全ての人々に、感謝の念を抱いているだけです」

「……そんなめちゃくちゃ暗い田で言われても、先生も反応に困るの」

「ふふふふふつ、でもね、先生、これを見てよ!」「

叫びながら立ち上がるルルノノ。もはや学級崩壊の有様であつたが、その手に握っていたのは、登校途中で披露したあの簡易機燐光測定器であつた。

「にーさんの、ほら、この、メーター!」

ルルノノはハクスイの頬に測定器をぐいぐい押しつけて、嬉しそうにめり込ませる。その蛮勇はともかく、誰もが値には興味をそそられたようだ。ハクスイとヴィエとショレエルと、さらにクラス中の視線が集中する。

「くわづか、ほんのちょっとぴりだが、なんと、測定器が反応しているのである。

『なつ!』

ルルノノを除く、クラス全体がひとつになつた瞬間であつた。ハクスイもまた、驚きに田を見張る。

「俺に……機燐光が……?」

ルルノノは鬼の首を取つたかのように、あるいは伝説の剣を抜いた勇者のように、誇り高い笑顔で測定器を振り回す。

「2! にだよ! ツー! にーさんにな、2の機燐光が芽生えているんだよ! 天使にはちつぽけな機燐光だけど、にーさんにはあまりにも大きすぎる一步だと思わないかな!」

クラスメイトまでもざわめく中、ハクスイはひとりで自分の手のひらを見つめていた。

「……2、か……」

その口元がわずかにほころんでいたことに気づいたのは、ヴィエだけだった。

彩光使養成学校であるフイノーノ高校が、他の高校と違っているところは、大きく分けてふたつある。

まず第一に、彩光使としての技能を習得するべく、武術、機縛光による光輝武装、あるいは上位学年にもなると、機方舟の操縦方法や、光導輪による専門技術を学ぶことができる点。

さらにもうひとつは、天使の社会としては珍しい競争制度を採用しているところにあり、これには未熟な生徒を彩光使にすることによって、悪魔による犠牲が増加することを防ぐ役割があつた。そのため、彩光使になれるのは学校を卒業しても直、狭き門である。

とはいっても、生徒たちの意識はさほど変わらない。昼休みは嬉しいものだし、お昼ごはんを学食で食べる時間は幸せなのだった。

混雑するプールのような人のひしめく食堂にて、なぜかその周囲だけはやけに風通しの良い状況になつてているハクスイの前に座るヴィエガ、納得いかないとばかりに首を傾げていた。

「わたしはともかく……まさか、ハクスイにまで、本当に効果があるなんて……」

「俺も未だに信じられない」

カレーのライスとルーをひたすらにかき混ぜる動作を繰り返しながら、ハクスイはどこか心ここにあらずといった感じだ。これが夢かも知れないと疑っているのだろう。

「なんつっても、ずっと諦めてたことだしな……それを叶えてくれたのは、正直、どれだけ感謝しても、足りねーっつーか……」

「…………るーちゃん、ね……」

きつねうどんの麺を箸で持ち上げたまま、ヴィエは視線を俯かせる。そうこうしていると、混雑の波間をするりするりと抜けながら、話題の主が戦果を手に帰ってくる。

「おまたせー！」

ルルノノはサラダ冷麺を乗せた盆を手に、颯爽とヴィエの隣の席につく。

「いやあ、あたしの列は混んでてやー、やっぱ夏はこれだよねー！」

「そういうや、下界はもう夏だっけか？　うちは一年中制服変わらねえから、たまに忘れるよな！」

「上にいると季節感ないものねえ……たまに積乱雲の中に入っちゃって、大雨が降るときに遭遇するくらいかしら……」

「太陽が普段より」機嫌にペカペカーとして見えたりしない？」「しねえなあ

ハクスイが否定すると、ルルノノは「そつかなー」とつぶやきながら割り箸をペキンと割った。ハクスイはヴィエが制服のポケットから小さな単語帳を取り出して、めくついていることに気づく。

「それ、シコレエル先生の宿題か？　こんなときここまでかよ、大変だな」

「そう、質より量の、ね。普通にやつたんじゃ終わらないから、休みナシよ、もう。あれってあながち[冗談じやなかつたと思つの」

「何の話？」

ハクスイが代わりに事情を説明すると、ルルノノは大層な勢いで

うなずいていた。

「すつごいね、ヴィエちゃんも、頑張っているんだね！」

「うん、まあ、ね……実っていない努力だけどね……」

「一言付け加えないと気が済まないのかお前は」

「まあ、どうせ家にいても暇だし……わたしつて趣味もなんにもないから……」

「暗い、暗いよヴィエちゃん！」

「何が書いてあるんだ？」

「見る？ 女神さまの語録なの」

ハクスイが受け取つてめくると、見出しには女神ヴィルシアの項目、と書いてあつた。

「ヴィルシアさまで、ああ、お前の母さんか

「ええ、雪と美の女神なのよ」

「力ある言葉を読み上げて、自信を高めよう、か……なになに……

『美意識を意識』、『キレイが勝ち』、『センスを磨いて、自分力を高めよ!』、『女子力アップは機運光アップ』、『スイーツは頑張った自分へのご褒美』……ルノ、これ分かるか?』

「うーん……未熟なあたしには、まだ難しいと言わざるをえないかな……！」

「なんか、すげえな。一種独特つづーか、その一族じゃねえと理解できない領域つづーか」

「……人のママを、バカにしないでくれる?」

ヴィエはハクスイから単語帳を奪い返すと、頬を膨らませた。

「あ、そうだ、なあルノ」

斜め前の席のルルノノに、ハクスイはルーのついたスプーンの先を向ける。

「きょうみたいな朝起こしに来るのとか、あと勘弁してもらいたいんだけどよ、無理か？」

「え、全然無理じゃないよ、こーさんが嫌なら、一生やらなによつ朝起こしに、の辺りでヴィエの手が一瞬ひくつと反応をしてたが、誰も気づかない。ハクスイは言葉を選ぶように虚空を眺めながら、ルルノノに視線を戻す。

「嫌つづーか……ほら、俺つて家族と一緒に住んでつからさ。いきなり入つてきたら、さすがに驚くだろつしよ。いや、前もつて言ってくれたら、全然構わないし、ありがたいんだが」

「ミズカちゃんね

「ミズカちゃん?」

「ハクスイの三つ下の口なの」

「へえー、こーさんつてやつぱりちゃんとこーさんだつたんだけ」「全然ちやんとしてないの。こつちはクズよ。ただの出がらしね。水に色すらつかないもの。中学一年のミズカちゃんのほうが、断然しつかりものなの」

「クズで」

「おー、やうなんだー、つちにも妹がいるんだよー、こつちも三個下なんだけどさ、もうどつちがお姉ちゃんかわからないつて感じで、あははー」

ハクスイは思い出す。確かに背格好は同じくらいだつたが、二二ノノのほうが断然落ち着いていた。

「それにミズカちゃんはすゞく可愛いの。ね、ハクスイ」

「お前にはやらねえぞ。貸せねーし見せねーし、ゼッテー触らせねえ」

田を尖らせるハクスイを指差しながら、ヴィエは気安い態度で友達に意見を求める。

「」の人、こんな一点の光沢もないような暗い目をして、凄まじい兄バカなの。るーちゃんはどう思つ?」

「家族の仲が良いことは素晴らしいことだよー 愛だね！ ラブアンドピース！」

きょう午前中を一緒に過ごして、ハクスイは思つ。彩光使の衣装に身を包んでいなければ、彼女は「」く普通の女子高生に見えた。むしろ、実に魅力的な美少女だった。

心底幸せそうに冷麺を頬張っていたルルノノは、突然身動きを止めて、右腕を持ち上げた。

「つて、あつ、着信！」

ルルノノが手首に巻いていた小さな輪がカラフルに輝いていた。光導輪である。その通話機能をオンにし、ルルノノは手首を耳元に近づける。

「はい、ルルノノです！」

ふたりは何となしに彼女を見守る。元気よく返事したルルノノの顔色はすぐに曇った。

「え、呼び出し……？ あ、ホント？ 悪魔が、うん、わかつた！ すぐ行くよ！ え？ 迎えに？」

言つや否やである。学食の入り口のほうから大きく手を振つくる娘の姿があつた。

「ルルノノさんー！」

その素性は一発で明らかとなる。彼女のまとう真っ白なローブは

あまりにも目立つた。ハクスイが先日見たのと同様、彩光使の証だ。
彼女は踊るような足取りでこちらに向かってくる。

「ユメちゃん！」

通話を切ったルルノノが、立ち上がりながら名を呼ぶと、件の彼女は両手を広げて声を招き入れるようなポーズとともに、笑顔を振りました。

「ユメちゃんでーす！」

ピンクの髪をポーテールに結んだ少女は、学食を優雅にデコレーションするように、ピカピカの機縁光を散布した。光子はカラフルに弾け、彼女の周囲で花火のような輝きを放つた。

「フィノーノ高校の三年生！ 生徒たちの人気者！ かつて最年少彩光使として名を馳せたけど、一ヶ月であっさりルルノノさんに抜かれた大新星！ “いつも誰かのヒロイン”がキャッチコピーの、ユメちゃんでーす！」

底抜けに明るいその笑顔が、彼女自身の機縁光によつてさらに可愛らしく彩られる。ある意味で素晴らしいその機縁光の使いこなしっぷりは、まさに彩光使の実力と言つたところか。

「自虐なのか、明るいのか、わからないの……」

「開き直つてんじゃねえのか？」

「三年生の余裕と言つてもらいたいですね」

素直な感想を述べた下級生のヴィエヒとハクスイに、ふふん、とユメは自信ありげな笑みを浮かべる。

彼女には華やかさがあった。それは外套の上からでもボリュームを感じられる大きな胸など、抜群のプロポーションによるところかもしれない。マスクット的な魅力を併せ持つルルノノに比べれば、ユメはとても彩光使らしいスタイルッシュな美少女であった。彼女の大きな垂れ目が、ウインクを繰り返す。そのたびにデフォルメさ

れた星光が食堂を飛び回る。

「あ、でもコメちゃん、迎えつてや、きょう機方舟持つてきたの？」
ルルノノの言葉に、コメは「チツチツチツ」と芝居がかつた仕草で、指を振った。

「遅刻しそうな日は、迷わずですよ！」

「だめだよコメちゃん！ 彩光使が支給されたものを私物扱いするのは！ 黙つてたらいいけど、公衆で叫んじゃバレちゃうからダメなんだよ！」

「うふふ、しかしそれが役に立つときもあるのですルルノノさん！ きょうだつてそれで、下界に直行できるんですからね！ 人生は綺麗事だけじゃ渡つていけませんよ！」

「た、確かに……コメちゃんの言つ事は、大抵正しいけれど……」

「言いくるめられているや！」

コメはルルノノの手を掴んで、まるでヨーロジカルのような動作で、天井に向かつて掲げる。

「というわけで、向かいましょー！ 悪魔の「づ」めく下界へ！」

「う、うん……あ、そうだ!」

ルルノノは良い」と思いついたとばかりの笑顔で、振り返つてくる。

「ねえ、にーさん、また一緒に来ない?」

「お?」

「こないだはにーさんにも格好悪い」といひ見せつけられたからね! 彩光使が華麗に悪魔を成敗するといひ、見てつてよー。あ、そだ、もし良かつたら、ヴィエちゃんもわー!」

ふいに声をかけられたヴィエは、もはや自分に関わる話は終わつたと安心していたのか、小さく口を開けて、お揚げをかじろうとしたポーズのまま止まる。

「……え? わたし?」

「シュレエル先生から、彩光使を手指して、すぐ頑張つてこりうて、聞いているよ!」

「う、うんまあ、どうかしら……結果が出でていないのに、頑張つているつていうのは……」

「それにーさんと同じく、武道で一クラス抜きを果たしたんだですよ! それなら実績は十分だもの、ヴィエちゃんが良ければ、一緒に地上に行つてみない?」

彩光使に認められた女性として、周囲のギャラリーが油揚げを口にくわえているヴィエに賞賛の視線を向けていた。だが、そんな風に注目を集めながらも、ヴィエの顔色は優れなかつた。

「で、でも……あ、悪魔……でしょ？」

ヴィエ工が視線を弱々しく泳がせる。それを見たハクスイは、すぐに手を挙げた。

「じゃあ、俺だけ連れていくてくれ」

「うん、もちろん！ って、え？ ヴィエちゃんは？」

ハクスイは押し黙るヴィエ工に代わって、口を開く。

「あー……ヴィエ工は、シュレエル先生の元で、機縦光の補講があるからな。だから、一緒に行けないんだ。だよな？」

「え、あ……う、うん……そ、そう、なの」

ヴィエ工は視線を伏せて、俯きながら、さらに頭を下げた。

「だから、『めんなさい、るーちゃん……あの、また今度、誘つてくださいの』

「んー、そつかー！ わかつた、残念だけど、次だね！ 一日も早く彩光使になれるように、応援しているからさ！」

親指を突き出してくるルルノノに、ヴィエ工は、「……ありがと」と小さくつぶやいた。

「……ま、いきなりはキツいよな」

ヴィエ工の後頭部に軽く手を当てるとい、彼女がほんの少しうなずいたような気がした。

三人はヴィエ工を残し、学食を出る。すると、廊下を早歩きしながらも、ユメが我慢できないとばかりに好奇心に彩られた視線を向けてくる。

「どうか、ルルノノさん、といひでそちらの御仁が、ハクスイさんですね？」

「もちろんそうだよ！」

「なにがもちろんなのかわからないが……あれ？ つか、俺の名前

を？」

「ええ、ルルノノさんから噂はかねがね。学年にすごく強い人がいるって聞いていますよ」

「つかあの、ユメ、さん？ 一応俺の先輩なんだからさ、別に敬語はいらねーっすよ」

「うふふ、ユメちゃんのモットーは礼儀正しく、ですかね。以前、ボランティアでお手伝いにいった保育園でも、最後まで徹頭徹尾、園児に敬語を貫きましたから、それに比べたらハクスイさんに礼を尽くすのは、いともたやすいものです」

「比べる基準がおかしくねえかな？」

ユメの不遜な物言いに、思わず語尾を荒くしてしまう。

校舎を出た三人は、職員用ポートの白線を斜めに横切つて雑に止められている機方舟に乗り込んだ。ハクスイはなんとなくシユレエルの苦悩の表情を思い出す。社会的な地位も上の彩光使には、生徒であろうがなにも注意できないのではないかと、シートベルトをつけながら思つてしまつ。一方で、この機方舟のフォルムには見覚えがあつた。

「これ、こないだ妹さんが乗つてきた船か……」

知り合いらしいことを言つていたから、二二ノノはユメから借りてきたのだろう。中学生相手に咎めないとこらが、実にユメらしいと思つた。ユメは高速操縦席に陣取り、適当な手つきで鼻歌を歌いながらパネルを操作し始める。

「フンフーン……小隊のみんなは、各自それぞれの悪魔の発生場所に向かつているみたいですからねー、ユメちゃんたちも、急ぎましょ。ん、まあ大体こんな感じですかね」

「ユメちゃんは、本当に細かいことは気にしない性格なんだな」

「え、惚れちゃいました？「うふふ、ダメですよ、コメちゃんはみんなのヒロインなんですかから、誰かひとりのものにななれませんからね、うふふ」

「コメちゃんは、本当に毎日幸せそうだな」

それが彩光使になるための資質のひとつであることは、もはや疑う余地もなかつた。

誰よりも楽しそうな美少女が、隣からハクスイに微笑みかけてくる。

「せうせう、にーさん！ 彩光使はいくつかの分隊に分けられていてね」

「ああ、うん、習ったよ。愛徳、勇徳、知徳の、三位一隊だり？」

「そ、さすがにーさん、知識が溢れて泉になりそうだね……す、すてき……」

「いや、だから、授業で習うだろ……」

「はい、にーさんの格好良むに田を奪われていた……そ、それでね、あたしとコメちゃんは、悪魔との戦いに重点を置いて、下界での活動を主に引き受ける勇徳^{パワーズ}分隊なんだよ。だからね、にーさんと一緒に地上に行くときは、他の隊より荒事がが多いかも知れないけれど、それは覚悟していってね！」

「ああ、それは俺の目標とも合っているからさ、もしろ助かるつてもんだ」

ハクスイたちの後ろの座席に寝転んで、ファッショングラビティ雑誌をめくつていたコメが、一応話は聞いていたらしく補足していく。

「ルルノノさんは、小隊の隊長さんですからね。すごいんですよ、あつという間にやってきて、コメちゃんの上司ですからね」

「へえ……お前、偉かつたんだな……」

てっきり警められて有頂天になるかと思ひきや、ルルノノの反応

は謙虚なものだつた。

「いやあ、なんでだらうね。評価してもらひつて、ありがたい限りだよねえ」

「うふふ……ルルノノさんが彩光使に抜擢されなければ、今頃ユメちゃんが小隊長に着任していたんすけれどね……うふふ……」「もしかしてお前、ホントはルノのこと嫌いなんじやないか?」

ついにはユメをもお前呼ばわりのハクスイである。足を揺らしながらくつろぎまくっているユメが、窓の外を一瞥して、その風景の流れる早さに感嘆を漏らした。

「はやーい、さつすがルルノノさんの機選光ですね。一小隊で頑張るより早いですよねー」

ユメの白銀の機方舟は雲を突き抜けて、地上へと降りてゆく。

（）

「あ、あの……瞬、くん……？」

「え、あ、な、なにかな！」

地上では休日のある日中だ。どこかで見たことのあるような初々しいカップルは、公園のベンチに並んで腰を下ろしていた。だが、ふたりその間には微妙な隙間がある。

座る少女は手を膝の上に置いたり握ったり、忙しない。少年のほうも、顔はまっすぐ前を向いたまま闇雲に目を泳がせて、少女を見ようとしなかつた。ふたりに共通しているのはその思いであり、手を繋ぎたいのだが繋げない、というもどかしさであった。

そんな幸せな光景を黒く塗り潰すかのように、気づけば、カラスの大群が正面の電線に止まっていた。そしてその全でが向きを揃えて、じーーーっとこっちを見つめているのだ。

「うわ、なんだあれ、気持ち悪っ！」

少年の言葉に反論するより、カラスたちは、カアー、カアー、と一斉に鳴き出していた。

「ほんとだ、いつのまに……なんだか出て行けって睨まれているような気が……あっ」

「えっ、ど、どうしたの、美月ちゃん？」

「ううん……わたし、なんだか、自意識過剰で……思い上がりっちゃつたなって……こんなわたしを、誰も見るわけないのに……うう、わたしつて嫌な女の子だわ……ああ、もうわたしはダメ……ダメ、ダメダメなの……ダメなの……」

「あ、あれ、なんかこの前も、『こんな美月ちゃん見たよーな！』

少年は頭を抱えた。それとともに、気分が急降下で落ち込んでゆく。まるで深い闇に引きずり込まれるような気分だった。

「ああ、だめだ、僕と一緒にいたつて、美月ちゃんが楽しいわけないんだ……美月ちゃんと付き合つなんて、世界で一番幸せなことをしていたから、僕にバチが当たったんだ……これから僕は人生で一度も良いことなんて起こらざに死ぬんだ……ああ、枯れて死ぬんだ……！」

「うう、ごめんね瞬くん……わたし『ごめんね』ときが瞬くんと付き合つなんて、大それた夢を見るから、こんなことに……『ごめんね、瞬くん……』」

少年と少女はそれぞれ別の方向を向いて、何度も謝る。その体か

ら真っ黒な霧が吹き出しているのを、カラスたちは嬉しそうに鳴きながら眺めていた。

「ワハハハ、見る、くだらん人間たちがわめいてあるぞ」「愉快痛快！」「やつら、希望を持つて行動しておるから、このようなくだらん結果となるのだ」「カアー！（それ見たことか）カアー！（それ見たことか）」「我らより落ち込んでいる人間を見るのは、気分が良いものだ！ワハハハ！」

悪魔たちは三々五々にわめき合つ。そして、彼らは祝宴をあげるよう、人間の吹き出した冥混沌を吸い取るつて、楽しむのだ。「旨い！人間の不幸は蜜の味だ！」「これで我らの力がますます高まるというものだ！さて、やつらの不幸をしゃぶり尽くした後は、新たな冥混沌の培養者を探そうではないか！」

『ワハハハ！』

そのとき、悪魔の笑い声を切り裂くように、雲間からひとつつの閃光が差してくる。悪魔はまるで狂つたように騒ぎ始めた。

「見る！」「何やつだ！」「あれは……まさか、天使の船か！？」

天敵の存在を嗅ぎ取つて叫ぶ悪魔の声が響く中、白銀の機方舟は飛行機雲をたなびいて駆ける。翼の生えた丸いフォルムの上に、輝ける何かが仁王立ちをしていることに、悪魔の一羽が気づく。その後、少女の笑い声が天から公園に降り注いだ。

「あーっはっはっはっはっは！」

機方舟の上に立つ幼い顔をした少女の背には光の翼。高校の制服に身を包み、その手に持つは黄金のハルバードである。

「人の心が闇に染まるとき、悲しみに沈む呼び声が今聞こえるつ！」
ルルノノが翼を広げて宙に浮かぶと、カラスたちは次々と人型へと変容してゆく。真っ黒な肌を持ち、カラスの羽を生やした、黒髪の男たちだ。カラスの毛皮を羽織っている。それに巨大なフォーケのような槍を持つていた。

「赤い血まみれの尖兵が！」「希望がなければ、人は不幸に落ちることもないのだぞ！」「貴様らのしていることは、人に絶望の種を撒くことに過ぎぬのだと、何万年もなぜわからぬ！失われた幸せは、より深い悲しみを呼ぶのだ！」「それ見たことか！ それ見たことか！」

カラスたちの叫びを、ルルノノは一笑に付す。若き天使は悪魔たちからの冥混沌を弾くようにハルバードを振り回し、加速し、そして落下した。

「はっは！ それでも人は光に向かわざるをえないのさ…」

（）

ユメが公園に機方舟を着地させたのは、ルルノノは悪魔の大半を

蹴散らしたあとであつた。その一騎当千の有様をモーターで眺めていたハクスイは、ハツチから降りながら、一度目の地上に足を下ろしたところで、感嘆のため息をついた。

「すげえなあ

なまじ武術の鍛錬をしているだけあって、ルルノノの腕が並外れているというのはよくわかる。伸縮自在で一撃必殺の威力を持つハルバードを振り回すルルノノが、有り余る機縕光によつて、凄まじい速さで飛翔しているのだ。巨大な戦斧をかいぐぐり、運良く彼女と接近戦を繰り広げられた悪魔も、翼から破壊力を伴なう機縕光を一気に放出する光輝武装『光波爆天』^{ボテンロク}により、一網打尽とさせられた。

ハクスイの後ろから、ユメは伸びをしながらやつてきた。横に並んできたユメは、ほくそ笑んで、ハクスイの顔をのぞき込んでくる。

「うふふ、ユメちゃんたちの隊長の実力、驚いたでしょう」

「ああ……あの口上も、かつてえな」

「おやおや、ハクスイさんもひょっとして、ああいつヒーローモノお好きなんですか？」

「……そうだな、俺は意外と熱血が好きだ。自分にはないものだからな」

高跳びの棒よろしくしなるハルバードは、次々と悪魔を切り伏せてゆく。

悪魔はそもそも天使を狩りやすい。天使の機縕光による武器は、悪魔に有効であるが、悪魔の冥混沌は言葉ひとつで容易に天使を行動不能に陥れるからだ。一匹の悪魔を倒すためには、三人の天使が必要だと、一般には教えられている。だが、ルルノノが相手にしていたのは、二十を越える悪魔の群れである。

「……まったく、すげえな、彩光使つてのは
クラス抜きを果たして喜んでなどはいられない。

「うふふ、そうでしょうそうでしょうう」

なぜユメが満面の笑みなのかはわからなかつたが、とにかく彼女は自分の隊長を誇らしく思つていいようだつた。だがその後、状況が変わつた。ルルノノはその凄まじすぎる実力により、悪魔たちから非難を浴びせられていたのだ。

「なんてやつだ！」見せ場も作らせないまま悪魔を撃破していきやがる！」「こんなぞんざいな扱われ方をするなんて、あんまりだ！」

「えつ、えつ、えつ」

効果はてきめんと、彼女の足は驚くほど鈍つた。悪魔に責められ、ルルノノは空に浮かびながらあたふたと辺りを見回す。

「そ、そんなこと言われても、これがあたしの仕事だし！」

ハルバードを振り回すと、悪魔たちは大げさな叫び声をあげて吹き飛んでゆく。

「うあああ酷いいいーー」「ぎゃああ死ぬつづつづつ」「痛いよつ、痛いよー」「うー

「そ、そんな！ そんなに強く叩いてないしつ！」

ルルノノは胸元に戦斧を抱きながら、慌てて悪魔に釈明をする。

「おい、ユメちゃん、あれ……」

「うーん……雲行きが怪しくなつてきましたね……」

「……あいつ、いつもあんなんのかよ」

「人が良いというか、生真面目というかなんというか、……うーん、このままじゃ、危ないです。ユメちゃんも、ちょっと行つてしますね！」

「あ、ああ、氣いつけてな」

ユメもまた、羽ばたいてゆく。ふたりだけで平気なのかと見守つていると、ユメも伊達に学生彩光使をやっているわけではないようだ。『光の弓』で、ルルノノを糾弾する悪魔から率先して次から次へと撃ち落としてゆく。そうしている間に、応援の機方舟が到着し出した。公園に着地した機方舟からたくさんの彩光使たちがやってくる。悪魔もまた、援軍の数では負けてはいなかつた。町中のカラスが集まっているかのようだつた。

天使と悪魔の戦いはますます激化してゆく。だがそれでも、個々の実力差は如何ともし難かつたらしい。ルルノノを筆頭にした天使軍が悪魔を制圧したのは、一時間後のこと。

フィノーノ中の彩光使が集まつた激戦は、天使軍の大勝利で幕を閉じた。

（）

帰りの機方舟で、ハクスイはユメに耳元で囁かれる。

「知っていますか、フィノーノで一番強い彩光使なんですよ、ルルノノさんは」

「すげえな…… 300万ポジだもんな」

天ツ雲を浮かべるだけの機鎗光を全て攻撃力に回せるのだ。歩く戦略兵器のような女だ。自分はとんでもない天使に目をかけてもらつたのだと、ハクスイは実感した。だが、それだけに、ハクスイはニニノノが言つた言葉が気になつっていた。力を使い果たして疲れた

のか、座席にもたれかかって桜色の唇から細い寝息を立てているルルノノの、無防備な横顔を眺めて、思う。

（たまに落ち込んで、機窓光がカラになるときがある、か……）
あの憂鬱そうなルルノノの姿をなかつたことにするために、彼女
をドMにしなければならないのだ。ハクスイは誰にも気づかれない
ように、静かにため息をついた。

第一話・7 「そして始まるふたりの物語」

「きょうは数力用ぶりの大きな交戦でしたからねー、中央庁に行つて、報告書を提出しなければいけないのが、ええもう、本当に面倒で面倒で……うふふ……」などと笑っていたコメと別れて、ハクスイとルルノノは場所を移す。

昨晩と同様に 本日も、ハクスイの家である。

途中、本屋に寄つてからハクスイの家にやつてきたルルノノは、部屋に来るやいなや紙袋を差し出してくる。低頭である。

「――お納めください、――さん！」

「……」

それは『はじめてのSM』と書かれたマーカル本だつた。一体天使の国のどこにそんな需要があつたのかは知らないが、女子高生が簡単に入手できるのは問題ではないだろうか、などと思いつつ、受け取る。

「……なんだこれは」

「あ、あたしたちには、きっと役立つはずでしょ！？」

「まあ、そうだな……」

教本はあつたほうがいい。料理にも何事にも、なんとかして自分を納得させると、ハクスイは本をぱらぱらとめくつた。

かなり過激な内容が多かつた、というか。

(むしろ、“ソレ”向けの本じゃねえのか、これ……)

なんといふかこう、倦怠期を迎えたカップルが手出してしまった薬のよくな、そんな匂いを感じた。

ちらりとルルノノを見やる。彼女は緊張している素振りを見せながらも、不安げではないようだった。その態度から、絶対に中身を見ていない、とハクスイは確信する。

「……や、参考にはさせてもらひ」

せつかくのルルノノの好意を無駄にするわけにはいかず、ハクスイはそう言つて横に置く。

「えつ、ちゃんと読んでよ、にーさん！」

「わ、わかったわかった、お前が帰ったあとでじっくり読むつて」「どうして今すぐじやだめなの？ なんでもほり、思い立つたが吉日なんだよ！ きょうやれることは、きょうやらなきゃ！」

拳を握りながらテーブルを乗り越えて接近してくるルルノノに、

ハクスイは本をかばいながら怒鳴る。

「ちょ、ちょっと待て、こっち来るんじゃない！」

「いいからいいから、じゃあ一緒に読もうって」

伸ばしてきた右手を払いのけると、その勢いが強すぎてしまったようだ。ルルノノはテーブルの上でバランスを崩す。その向かう先は、ハクスイ。

「ちょ、お前、」

「わ、ひゃあ！」

フィーノーノ一位の彩光使が怪我でもしたら大変なことになる。ハクスイは全身を使って倒れてきたルルノノをかばう。柔らかな身体に押し倒される形となり、したたかに後頭部を打ってしまった。

「いつ……」

「わ、わ、『ごめんなさい、にーさん！』

胸元から顔を覗き込んでくるルルノノ。金色の髪が揺れて、ハクスイの鼻孔にひまわりのような香りを落とす。思わず、どきりとしました。

「いや、大丈夫だ……意外と、その、思っていたよりは意外と重くなかつた」

「も、もう！　せつかく心配してたのに！」

頬を膨らませるルルノノの視線が、倒れたハクスイの右上辺りで固定されていた。寝転がりながらも、顔をそちらに向けると。

『はじめてのSM』の、開いたページがあらわになっていた。

手や足をベルトのような拘束具で縛られた女性が、全裸であられもないポーズをしているような、そんな。

ほんっ、と音がした。冷や汗を浮かべながら見れば、ルルノノの頭の上から機械光の蒸気を噴き出していた。トマトと変わりない顔色の彼女はそのまま、録画したビデオを逆回しするような動きで、元の位置へと戻つてゆく。

再び、テーブルを挟んでハクスイとルルノノ。

ハクスイは後頭部に手を当てながら、壁に向いてつぶやく。

「…………だから、言わんこっちゃねえ…………」

「…………す、スマセン…………」

なぜだか正座をしたまま肩を竦めるルルノノ。そのまま小さくなつて消えてしまいそうな声であった。

「うつしよひ。ものすごく空気が重い。

「うーむ」とハクスイがマニコアルをペラペラとめくつ正在、ルルノノが慌てて両手を広げながら努めて明るい声をあげた。

「あ、あのさつ！」

「ど、どうした？」

視線を合わせると、頬を赤らめて一瞬だけ硬直するルルノノ。彼女は少しづつ田舎者ながり、言葉を紡ぐ。

「に、にーさんとヴィエちゃんって、どんな関係かな、つて！」

「え？　いや、えーっと……」

ハクスイ自身はあまり『悪い雰囲気』などに影響を受けるタチではないが、それでもルルノノが居づらそうにしていたため、それに乗っかることにした。

言葉を選びながら、告げる。

「つか、まあ……どんな関係って、言われてもな、ただの友達つてわけじゃあねえけど……本当に、腐れ縁なんだよ。俺が覚えている限りは、悪魔の大襲来アリギエーリ　　フィノーノの危機、以来の、かね」

「大襲来……」

それは、ハクスイの世代の天使ならば誰もが覚えている大事件の名前だった。

「八年前の事件だな。あんときさ、フィノーノまで根性で悪魔が登つてきただろ？　まあそこで、俺たちのいた小学校が悪魔に襲われてさ、それまでは一緒にクラスだってことも知らなかつたんだが、ヴィエがすつづけー覚えててな。以来、なにかあつたら付きまとつてくるし、そばをうろちょろしてきてさ。あいつ、外面とか顔は良いくせに、泣き虫だつたり悲観的だつたりするからよ、なんか放つておけねえんだよな」

ルルノノは何か言いたげに口を開閉していたが、結局言葉が思い浮かばなかつたようだ。

「だから、言つてしまえば友達つてより、ヴィエトは手のかかる妹みたいなもんだな。すつぐーたまには可愛いと思つときもあるけど、ほとんどは憎たらしい限りだぜ。つーか、お前も、おかしなことを聞くよな、俺とヴィエトの関係なんて」

「な、なにを言つのやつ？」

ルルノノは頬を赤く染めながら、堂々と両手を広げて宣言する。

「コイバナが嫌いな天使なんていないんだよー！」

「そ、そうなのか？」

「うん！ 機鎧光の半分はね、恋愛でできているんだからね！」

「初耳だ……でも、俺とヴィエトは全然そんなんじやねえから、期待に添えなくて悪いな。あっちだつて俺のこと、氣を使わなくて良い楽な相手、ぐらいにしか思つてねえだろ」

「……にーせんはそう思つても、ヴィエトちゃんの方は、どうかな

……」

「ん？ なんか言つたか？」

「う、ううん！ で、でもさ、ほらー、まだまだ上を田指すつていう意味では、まだまだ人の恋愛に積極的に首を突っ込んで行かなきゃいけないからさつ」

「ド迷惑だなオイ……つかこれ以上、一体なにならなるつもりなんだ、お前は」

ハクスイは改めてルルノノを眺める。凄まじく顔が良く、運動神経も抜群で、天ツ雲を浮かべるほど機鎧光を持ち、最年少で彩光使試験に合格。さらに性格も明るく社交的。常に回りには笑顔が絶えず、誰からも愛される。

ハクスイから見たら、彼女は誰よりも完璧な天使だ。他人が羨むべきであろう何もかも持っている。だが

「……まあ、でもお前も、人知れず悩んでいるんだもんな」

「う、うん……な、なんか恥ずかしいな」

所在無さげに髪を指でいじるルルノノ。

なんとなく、きょうは「このままSMを」というムードというわけではなくつたような気がする。

「とりあえず、疲れ切ったしさ。俺も考えてみるから、きょうはお開きつてことで、どうかね」

「あ、うん……」「にーさんがそつまつながら……」

残念そうではあるものの、うなずくルルノノ。

「俺は俺で色々考えてみるからさ」

今後の方針や、どうするのが一番ルルノノのためになるか、など。「正直俺の手に余る部分が多いかもしけれねえけど

「ううん、そんなことないよ、にーさん！」

熱狂的な否定の声に、少しだけ驚いてしまう。

「……なんか俺よりも、お前のほうがよっぽど俺を信頼しているみたいだよな」

「だつて、にーさんだもん、当たり前だよ」

頬をかく。真っ直ぐな視線を浴びて、悪い気はしない。

「……じゃあ、またな、ルルノノ」

「うん、きょうもありがとね、にーさん」

相変わらずの笑顔で手を振り、ルルノノは立ち上がった。だが、それから玄関から出る間際、扉の隙間からこちらを覗き込みながら、

小さくつぶやいてきた。

「……くれぐれも、え、えっちなことば、禁止だからね……！」
ハクスイは犬を払うよう、さつさと帰れ、と手を振る。

「さて、と

授業の勉強の代わりに、ハクスイは部屋でひとり机に向かいながら、先ほどのマニコアル本を広げる。

「さすがにもう、恥ずかしがっている場合じやないよな……」

昼夜問わず現役の彩光使から手助けをしてもらい、一度も下界に連れていってもらつた。さらに、悪魔と戦い続けるルルノノの危険も十分にわかつてゐる。

その上、自分を完全に信じきつてゐるルルノノの頼みだ。これでどうにかできないのなら、天使として生み出された意味がないとうものだ。

「任せとけよ……俺に……」

ルルノノのために、そして他ならぬ自分のために。
一部の慈悲もない、完全なドSになるのだ。

ドM契約を結んでから、翌週の休日である。ハクスイは住宅地を離れて、フィノーノ中心街にやつてきていた。目的地は、フィノーノで最も大きな総合病院である。

三十分ほど検査を受けてきた後で、機縫光内科の診察室に通されたハクスイを待っていたのは、スーツの上から白衣を身につけた黒髪の女医であった。彼女とは長い付き合いだ。女医はハクスイに気づくと、椅子を回して向きを調節し、軽く手を挙げて女っ気の薄い挨拶をしてきた。

「やあ、少年、久しぶりさ」

誰かを想像させるような爽やかな笑みを浮かべる彼女は、アマド。

ハクスイの主治医だ。

「どうも先生、いつもすみません」

彼女はまだ若く、学生を終えたばかりのようにも思えた。物腰が落ち着いてくれば、それに伴つて容姿も大人びてゆく天使にとつて、外見年齢とはすなわち精神年齢に値する。そういう視点で眺めると、女医は爽快な印象もあいまつて、とても子供っぽく思えた。身長こそは長身のヴィエ工に並ぶであろうが、笑うと大きな瞳が線になるような様が非常に愛らしかった。

編んだ黒髪を頭の後ろでアップにしたアマドは、資料に目を落としながら、長い脚を組み替える。彼女が浮かべた笑みは、つぼみも花咲くような可憐なものだった。

「相変わらずかい？」少年

「ええ、まあ」

Tシャツにジーパン姿のハクスイの前で、アマドは先ほどの検査の結果を読み上げる。

「んーと……やはり、体調に異常は見受けられない。心身ともに健康そのもの……まあ、これはいいことなんだけじね。でも、まだ症状は不明、原因も不明。きみの“無光病”は、大きくなつてくれれば自然に回復すると思っていたんだけどさねえ……」

先例も類型もなかつたため、とりあえずハクスイに付けられた病名、それが無光病であつた。名付けたのは、八年前の当時からハクスイを担当していたアマドである。

アマドはしばしカルテを手でなぞつた後に、あつけらかんと話を変えた。

「こないだね、久々に天ツ雲・グラソレープシスに戻つてさ、^ラ奇蹟^{ボブ}核に関する新しい論文が発表されたからって、学会に参加してきたんだけどさ」

「はあ

グラソレープシスとは、天ツ雲の中でももつとも栄えている、いわば首都のような場所だ。原初の天使を生み出したとそれでいる、父神の住まつ天ツ雲である。

「機縫光がゼロなのに生き続いている天使は、論理的には存在していないってことが、とうとう語られていたよ。私はなにも言わなかつたけどさね、少年はこの世の理論ではどうも、なかなかに存茌しくい状態のようだよ」

「まるで早く死ぬのが正しつて言われているみたいだ……」

ひとつやふたつの冗談で傷つくような関係ではなかつたが、すぐ
がに首を傾げてしまつ。

アマドはまるで陽だまりに寝そべる老猫のよう、穩やかに田を
細めて笑つてみせた。

「ま、焦らずにやつていこいつ。医学も日々進歩しているから。は
つは、のんびりのんびり」

「……ンなこと言しながら、先生だつて、奇蹟核とか機縫光につい
て、新たな説が出るたびに、あちこち飛び回つてゐるじゃないです
か」

ハクスイがそう返すと、アマドはカルテで顔の下半分を隠しながら、視線を斜め下に向けた。

「……べ、別に、少年のために頑張つて勉強しているわけじゃない
んだからね」

「いや、いいすから、そういうの。いちいち茶化さないでも、感
謝しますから」

「むむ、素直にそう言われたら、恥ずかしいじゃないか」

演技を止めてから、素のアマドはわずかに頬を染めてそっぽを向
く。

医使たちの話では、アマドはフイノーノにいるのがおかしくら
いの、優れた学者なのだと。そんな彼女がこの病院に居続けて
いる理由を、ハクスイは知らない。まさか自分のためだと思ひ込む
ほど、ハクスイは自惚れてはいない。

そんな彼女がまたふざけないよつ、ハクスイは眞面目に尋ねた。

「そもそも、機縫光つてなんなんすかね」

「機縫光か。なかなか奥深い質問をするさね、少年。それを解き

明かしたときには、グラントレー・プシスから銅像を作つてもらえると思つさ」

「別にそんな高尚な答えを求めているわけじゃなくてですね」

「機撰光は人間と天使を分ける能力さ」

「え？」

「翼も光輝武装も、奇跡だつてそうさ。全て天使だけのものだろう？ 機撰光を持たない天使は、ほとんど人間と変わらないだろう。ただし、少年も知つてゐる通り、人間は泥で作られているから勝手に死ぬことはないさね。それに対し、天使は不安定な火というエネルギーで作られてゐる。燃え尽きちゃ えばなにもなくなつておしまいさよ？」だからこそ機撰光でその存在を固めておけるのさ」

「……まあ、どれだけ俺が不安定な命かつてのは、自覚していふつもりですが」

なんだか怖くなつてくる。

「しかし現に、少年のように命を繋ぎ止める機撰光がゼロでも生きている天使がいるからこそ、奇蹟核つていう新たな概念が生み出されたんだけどね」

「その研究が進めば、俺の無光病の治療法が見つかるかもしれないんですよね」

「理論ではね。今のところは研究しようと思つても、手も触れられない、目にも見えない、はつは、お手上げなのさ」

「それが専門家の言うことっすか……？」

「はつは、今だけはひとりの女性として、少年と話していふからね」

「頼みますから、俺の前では医使として話してください」

なにやらカルテに記入していいたアマドが、ぼつりとつぶやく。

「しかし、少年を産んだ女神様も、心配していふだろうにねえ」

「……そう、なんとかね」

「そりゃそいつだよ。私だったら心配するからさ」

「アマド先生は女神じゃないでしょ？…………あ、でも変わったこと」と言えども、「一個だけ」

一応報告をしようとして、ハクスイはルルノノの顔を思い浮かべながらさりと語る。

「俺、こないだ計つたら、機鎧光が2ポジになつてたんすよ」

その瞬間だった。がたがたがた、と椅子を蹴り飛ばしてアマドが立ち上がっていた。その表情は、驚きに目を見張つている。ハクスイはアマドのそんな動搖した表情を初めて見た。

「ま、まさかそんな！ ホントかい！」

「は、はい、マジです」

「ど、どうやって回復したのさ？　え、なにがあつたの？　ちよ、ちよっと先生に話してみ」

「えーと……うちの学校に史上最年少彩光使がいて、ですね」

アマドの勢いに押されながらも、それは大事なことなのだろうと思いつつ、ハクスイはルルノノと知り合つた過程から昨日の話まで丁寧に説明する。

「ははあ、なるほどねえ……彩光使さんと地上に立つたりね……なるほど、なるほど、なるほど……うん、私もちょっとその子のことと調べてみようかな」

「調べるって、なにをですか？」

アマドはそう意識せずに女医としての雰囲気をまとめて出す。

「色々と、や。私はね、奇蹟核つてのは天使の心なんじゃないかと

思っているんだよ。だつたら非常に纖細だろ？ 少年が彩光使に特別な感情を持つているから機燐光が生まれたのかもしれないし、他に原因があるのかもしれない。だからね、色々な可能性を検証しないといけないのさ。これはどうやらちょっと、やることができる、むしろ嬉しいくらいだね」

アマードは嬉々として語り、それからイタズラっぽい視線を向けてくる。

「そういうえば、手っ取り早く機燐光を復活させる手段もあるんだけどね、これはオススメできないけど、一応聞いてみる？」

「じゃあ、聞いてみるだけ」

知識は無駄にはならない。それも本当は有識者なアマードの言葉だつたらなおさらだ。

「ええと、それはね……心がとても耐えきれないほど衝撃を受けることなんだよ。奇蹟核の中にある機燐光は無限だ。だから生命の危機に瀕した奇蹟核が、びっくりして今までにない量の機燐光を吐き出すだろう、っていうのは、私の理論なんだけどさ」

得意げに言ったアマードに、ハクスイは半眼を向ける。

「教えてもらつたことがある気がします、けど……それ、下手したら死ぬつて昔、言つてましたよね」

「はつは、機燐光がないくせに奇蹟核まで潰れたら、そら完全に死ぬつてば」

「……」

ルルノノやヴィエと違つて、どこまでが本気でどこまでが嘘かわからない。それこそが年の功であるつかと、ハクスイは言葉には出さず思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5992y/>

全力天使【ドM】

2011年11月23日19時48分発行